

「五条坂の登り窯—京焼 今むかし—」



道仙窯調査全景

講演1 「五条坂の工房と登り窯を歩く—語りと写真測量から考える京焼今昔—」
余語琢磨氏（早稲田大学）

講演2 「京焼の登り窯を掘る—道仙窯・浅見五郎助窯・井野祝峰窯—」
岡田麻衣子氏（公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所）

講演3 「五条坂の今昔と考古学—京焼登り窯発掘調査の歩み—」
木立雅朗氏（立命館大学）

- ・日時 令和2年11月21日（土）
開始：14時（13時30分 受付開始） 終了予定：16時
- ・会場 京都アスニー4階ホール
京都市中京区丸太町通七本松西入

五条坂 音羽焼・清水焼関連略年表

年 代	で き ご と
9世紀～	鳥辺野が葬送の地となる
応和3年(963)	空也が西光寺(のちに六波羅蜜寺)を建立
天仁3年(1110)	平正盛(清盛祖父)が六波羅に仏堂を造営以降、平氏の拠点となる。
慶長年間(1596)～	清水焼開窯の伝承
慶長10年(1605)	京焼の初見「肩衝京ヤキ」 若宮八幡宮が六条醒ヶ井から五条坂へ移転
元和年間(1615)～	三文字屋九右(左)衛門が東山麓に粟田焼を開窯
寛永18年(1641)	若宮八幡宮門前の音羽川沿いで音羽屋惣左衛門が開窯
寛永20年(1643)	清水焼の初見「清水焼の水建(←建水の誤記)之を恵まるなり。」
寛文6年(1666)	音羽焼の初見「音羽焼 寛文六年 九月六十日 音羽焼の茶碗 茶陶」
貞享元年(1684)	音羽焼の窯場の初見「若宮八幡宮…この宮の門前より南へ行く町あり。…そのあたりに今焼の器物さまざま當めり、音羽焼として京師をもてはやす。」
18世紀初頭	「清水焼」の項に井筒屋甚兵衛・音羽屋惣左衛門の記載
天明2年(1782)	五条坂焼物仲間結成、青木木米・奥田颯川らによって京焼磁器開発
文化元年(1804)	高橋道八・和氣亀亭によって本格的に京焼磁器の生産開始
文政5年(1822)	五条清水の焼物の取り扱い高が17,000両との記録
嘉永5年(1852)	登り窯が10基、それを経営する窯元が14軒あり
元治元年(1864)	『花洛名勝図会』に五条坂の陶器店の賑わいが記される
明治3年(1870)	京都府に舎密局が設置
明治5年(1872)	登り窯が21基、45人の製造業者あり 第一回京都博覧会、京焼多数出品
明治11年(1878)	ゴットフリート・ワグネルによって西洋窯業技術の導入
明治14年(1881)頃～	貿易不振による不況
明治19年(1886)	陶業界が五条清水に巽組合、粟田に良組合を設立
明治25年(1892)	若宮八幡宮前に五条清水陶磁器陳列所が開設
明治27年(1894)	日清戦争勃発 好景気 京都陶磁器商工組合が設立(粟田と清水が合同)
明治29年(1896)	五条坂に京都市立陶磁器試験所を設立
明治43年(1910)	京阪電鉄開業 五条停留所がターミナルとなる
明治45年(1912)頃	登り窯が15基、高橋道八窯と三浦竹泉窯の登り窯2基が閉窯
大正2年(1913)	清水五条から南側の日吉地区への操業地移転が開始
大正3年(1914)	第一次世界大戦勃発 好景気 理化学陶磁器輸出の活発化
大正5年(1916)	日吉地区南側の泉涌寺地区での築窯開始 濱田庄司が見聞調査
大正7年(1918)～	第一次世界大戦の余波で不況
大正9年(1920)	五条坂陶器まつりがはじまる 六道まいの参拝者を目当て
大正12年(1923)	関東大震災による不況
昭和5年(1930)	世界恐慌による不況
昭和6年(1931)	景気回復
昭和9年(1934)	京都陶磁器工業組合が設立
昭和12年(1937)	日中戦争勃発 理化学陶磁器・電磁器など生産が盛んになる
昭和18年(1943)	会社統制法施行
昭和20年(1945)	五条通南側が建物疎開
昭和25年(1950)頃～	内外需要の増加 好景気
昭和26年(1951)	京都府陶磁器協同組合が設立
昭和36年(1961)～	ガス窯・電気窯へ移行され始める→煤煙問題深刻化
昭和41年(1966)	山科に清水焼団地ができる
昭和42年(1967)	五条通に東山バイパスが開通
昭和46年(1971)	京都府大気汚染防止条例施行→登り窯使用禁止
昭和55年(1980)	京都府陶磁器協同組合の登り窯停止(2年後に使用停止を決断)

令和2年度京都市埋蔵文化財研究所文化財講演会

「五条坂の登り窯—京焼 今むかし—」

趣旨説明 —「京焼」概説と講演会の目的—

木立雅朗（立命館大学）

「京焼」とは？

ここでは江戸時代以降に洛中・洛外で焼かれた焼物を「京焼」と呼ぶことにします。それは、京都の焼物が以下のような歴史を経てきたからです。

安土桃山時代、楽焼・押小路焼が生産を開始し、「京ヤキ」と呼ばれましたが、これが現在の楽焼に繋がっています。その後、江戸時代にはいると、徳川幕府が京都の復興を進めます。豊臣秀吉と同じく、天皇や京都の権威を高めることで、自らの権威を維持しようとした。そのおかげで京都はバブル期を迎え、さまざまなアイテムが生まれます。その一つが焼物でした。

青蓮院宮栗田御所の領域で栗田口焼が焼かれはじめます。栗田口では、瀬戸から陶工を呼び寄せて、登り窯を築いて茶器を焼成したようです。主に唐物（中国陶磁）写し、高麗物（朝鮮陶磁）写しを作っていました。その後、八坂焼、清水焼、音羽焼（五条坂焼）、修学院焼、御菩薩池焼、御室焼、乾山焼などが相次いで現れますが、18世紀になると栗田口焼と清水・音羽焼の2大産地を集約されるようになりました。栗田口焼は範囲が広がって「栗田焼」と呼ばれるようになり、知名度の問題から音羽焼は清水焼と一体化してゆきました。

そのため、江戸時代から昭和初期まで、京都の焼物といえば、栗田焼と清水焼の二つが上げられていました。明治維新後、京都の産業は大きな苦難を経験しましたが、栗田焼は輸出に成功して企業化してゆきました。明治末から大正初期には栗田焼や清水焼の産地が手狭になり、日吉や泉涌寺にも産地が拡大してゆきました。ところが、昭和初期の世界大恐慌の影響で、輸出に力を入れていた栗田焼が壊滅的な打撃を受け、大きく衰退しました。今では焼物の伝統産地だったことが、全くわからなくなってしまいました。

現在、清水焼が京都の伝統的な焼物だと理解されていますが、この呼び方では楽焼や栗田焼を含むことができません。もし、栗田焼が存続していれば、京都の焼物は楽焼・栗田焼・清水焼の3つの呼び方で呼ばなければならなかったはずです。

「登り窯」とは？—京式登り窯—

楽焼が家屋の中で、小型窯を使用して焼物を焼くのに対して、それ以外の京焼は斜面に「登り窯」を築きました。五条坂では十分な斜面がない場合、盛り土をして山のような斜面をわざわざ作りだしたりもしました。瀬戸から導入された登り窯は「横室型（よこしつがた）」の登り窯と呼ばれています。登り窯はいくつかの部屋で仕切られていますが、一つの部屋は蒲鉾のような形をしていました。ですから、外から見ると「蒲鉾」を何個も並べたような形

にみえました。ところが、有田焼では一つの部屋の天井がドーム状になっているため、外から見ると「芋虫」のようにみえます。各部屋を結ぶ炎の通り道は、瀬戸が「縦狭間穴」、有田焼が「横狭間穴」と呼ばれるものでした。窯の外見だけでなく、各部

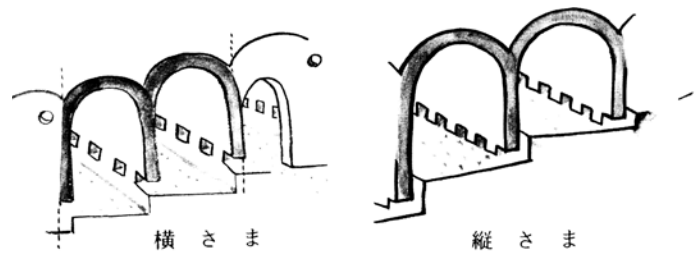


図 2種類の狭間穴の模式図

屋の内部も違っていたのです。京都では外見は瀬戸式の「横室型」、内部は有田式の「横狭間穴」でした。ちょうど、瀬戸と有田の折衷のような窯構造をとっていました。その理由については今後の研究課題です。

この登り窯は、有田焼では文禄慶長の役をきっかけに朝鮮半島経由で導入されたと考えられています。それ以前の穴窯は部屋が区切られていないため、窯内の温度差が大きく、使用する燃料も膨大に必要でした。登り窯が導入されたことで、部屋内の温度差を小さくすることができ、燃費も向上したと言われています。しかし、その窯焚きは高度な技術と経験が必要でした。

「五条坂」の「むかし」と「いま」

「五条坂」は伝統的には大和大路から東大路までの五条通り（五条橋通り）を示す地名でした。この場所は清水寺などへの通過地点としても重要ですが、江戸時代には山科に抜ける渋谷街道のほうが発展していました。音羽川が作った自然の谷地形を利用して音羽焼が焼かれ、江戸時代の半ば以降に窯が増え始めると、音羽川の周辺や渋谷街道付近に陶工たちが住み始めました。音羽焼が発展し、清水焼と一体化してゆくころ、五条橋通りに問屋街が形成され、問屋と陶工の二人三脚によって五条坂が発展してゆくようになりました。五条坂では、問屋の助けを借りることができた反面、栗田焼や後に発展した日吉・泉涌寺地区よりも零細な陶工が多かったようです。栗田焼は陶器中心でしたが、五条坂周辺では磁器の焼成も盛んに行うなど、栗田焼とは差別化を計って競合していました。そのため、明治以降に清水焼の西洋化・近代化を図る上で、栗田焼とは違う展開をとることができました。陶器中心だった栗田焼とは違い、理化学磁器の製造を積極的に取り入れることができたのです。

日清・日露戦争をへて、明治末から大正期に日本経済が発展してゆきますが、その影響で京焼も生産を拡大しました。音羽川や渋谷街道周辺はすでに手狭になっていたため、まだ空き地が残されていた五条通りの北側に京都市陶磁器試験場が作られ、その周辺に新しい窯場が形成されてゆきました。高山耕山や入江道仙はその流れを受けて、化学陶器・理化学磁器と呼ばれる磁器を生産し、産業の近代化に貢献しました。アジア太平洋戦争で大きな痛手を受けますが、軍需品の製造などによって五条坂は生産を継続することができました。戦時中には建物疎開によって五条通り南側を失い、その後、国道1号線が通過することによってか

つての「五条坂」は分断を余儀なくされました。

戦後の困難を乗り越え、高度経済成長期に差しかかる頃、周辺の宅地化や電気窯などの普及によって、登り窯の煙害が問題視されるようになりました。ついに、昭和 43（1968）年には京都府大気汚染防止条例が施行され、原則として京都市・宇治市では登り窯の窯焚きが禁止されました。それから 50 年近くが経過しています。

バブル崩壊やリーマンショックの影響を受けて、京焼の生産自体、大きく後退しましたが、近年のインバウンドの結果、建物疎開を免れた五条坂北側の町家や陶磁器店が撤退を余儀なくされました。もはや、五条坂は「やきものの町」というより、外国人観光客向けのホテル街に変貌しつつありました。その結果、2017 年に二つの登り窯が失われました。そして外国人観光客の多さから、日本人観光客が京都を敬遠しはじめましたが、2020 年 2 月以降、新型コロナウイルス感染症の影響が追い打ちをかけ、外国人観光客の姿が途絶えました。ホテル建設中の工事現場や空き地が痛々しい現状です。今後どうなるのか、「コロナ後」の姿を想像することができません。

江戸時代から存続する伝統的な産地は、もはや、五条坂しかありません。登り窯の使用が禁止されてから約 50 年が経過したにも関わらず、五条坂には登り窯が 4 基も残っています。明治時代以降、五条坂では常に 15～20 基程度の登り窯が操業していたと言われていたことから、そのうち 4 基が残されていることは、奇跡としか言いようがありません。所有者の深く熱い想いと努力の結晶に違いありません。

各報告の意義

① 余語琢磨「五条坂の工房と登り窯を歩く」について

私は 2005 年以前から五条坂の民俗考古学調査に関わってきました。急速なインバウンドによる変化を迎えて右往左往していたところ、それを見かねた早稲田大学の余語琢磨氏が援助の手を差し伸べてくれました。余語琢磨氏をはじめとする早稲田チームとともに、2018 年度から文部科学省の科学研究費を頂いて京式登り窯の研究を開始したのです。余語琢磨氏は登り窯の 3D 測量を指導するかたわら、早稲田大学の学生たちと五条坂周辺を歩き、聞き取り調査を行っています。建築史の関係者とも合同調査を進めました。五条坂以外にも登り窯が残されていることも興味深い調査成果ですが、「京焼」を考古学や文献史学・美術史だけでなく、文化人類学・民俗学的な研究の対象として研究していく方向は、これまでになかったことです。

② 岡田麻衣子「京焼の登り窯を掘る」について

京都市文化財保護課は、インバウンドによる急激な開発が進むなか、登り窯の発掘調査を進めはじめました。岡田さんは、3 つの登り窯の発掘調査を詳細に報告してくれます。京都で始めての、本格的京焼窯跡の発掘調査成果です。近現代考古学の発掘成果としても、はじめての本格的なものだと思います。

残念なことは、調査された3件ともホテル建設に関わる発掘調査であり、発掘後、2つの登り窯が失われました。しかし、道仙化学製陶所窯跡の発掘調査では、ホテル開発側が地元の遺跡を残すことで他のホテルと差別化を図りたいと考え、登り窯の発掘調査を行ない、現在、復原を計画しています。将来、この発掘成果が宿泊客だけでなく、地元の地域史資源として広く活用される予定です。そのため、登り窯の発掘調査が、地域の文化資源の資源化のためにも重要であることを示してくれています。これまで、考古学における京焼研究は著しく遅れていますが、この成果によって、はじめて京焼窯跡の意義が見直されると思います。

③ 木立雅朗「五条坂の今昔と考古学」について

お二人のご報告を受け、五条坂を歩き、調べたことや感じたことを紹介します。そして、考古学の成果を中心にして、地域資源としての登り窯の可能性について考えてみたいと思います。

五条坂の工房と登り窯を歩く —測量記録と語りから考える京焼今昔—

早稲田大学 人間科学学術院

余語 琢磨

takuma@waseda.jp

はじめに

立命館大学に国内留学する機会を得た私と家族は、3か月ほど（2013年から2014年にかけての冬）ですが、東山の京町家に住み、娘は東山開晴館に一時転校しました。当初は、古い町並や商店の売り物にみる面白さに目を奪われていましたが、やがて気づいたのは、京都の人にとっての「小学校区」の重さや五条界限に息づく対面ネットワークなど、“無形の世界”の存在でした。ご近所さんの助言「〇〇に教えてもらた言うて〜」が、いかに有り難かったか…。

一方、その頃は、京都におけるインバウンド需要が急カーブの右肩上がりになり始めた時期と重なり、増え始めた町家転用の民泊利用の旅行客が、夜中や早朝にキャリーバックを石畳のうえで転がして移動していく「ガラガラ族」への不満を、よく耳にしました。

インバウンド開発による歴史的空間の消失

その後に五条界限を覆った観光開発による空間・風景の改変により、小川文齋窯、入江道仙窯、浅見五郎助窯を中心につい近年まで残っていた“五条坂北側に広がる京焼に関する歴史的空間（明治～昭和期の近代産業遺産）”は、複数の企業の開発進行のなかで、ほぼ同時に土埃の立つ更地となって失われてしまいました。



図1 五条通遠景 *K



図2 五条通の表町家+道仙窯の東隣にできた更地（合成）



図3 東側更地からみた小川文齋窯とレンガ煙突



図4 京都新聞記事

この“喪失の光景 scene of loss”とモンタージュするように私の目に浮かんだのは、同じ五条坂の北側やや奥、東山開晴小中学校近くの京町家の奥で拝見した、(木立さんより詳しく報告される)伊吹弘氏の2種の屏風絵でした。



図5 伊吹弘「強制立ち退き前の五條坂南側心象風景」第2扇(部分、1983年制作)



図6 伊吹弘「昭和二十年春 五條坂南側町並散華の図」第2扇の同場所(部分、1992年制作)

木立さんは、この絵は、写真などから復元したわけではなく記憶をたよりに描いたものであることを伊吹夫人より聞き取るとともに、地域の「記憶遺産」としての重要性を指摘して、五条坂周辺に暮らす人々を考える上でたいへん示唆に富みます。また、図5には描かれていない背景としての専売局やその前の町家が図6に描き込まれているのは、「広大な空閑地の背後が見通せるようになった時の衝撃」の表現であるとしています(木立2020)。たしかに、旧五条通が今の北側歩道の幅しかなかった時には、北側町並の軒下に背中を張り付けても、まず南側町並の背後にある建物群を見ることはできなかったでしょう。

加えて筆者は、「心象風景」が先に描かれ、「町並散華」が9年後に描かれ直すことに注目します。上図は、失われた都市光景への“追憶”がテーマでありましょうが、その心象は描かれることで昇華しませんでした。戦時中の強制建物疎開という“暴力”による歴史的都市空間の解体は、伊吹氏が愛着を感じていたであろう、町並自体と、そこに存在していたさまざまな人々の“関係性”や“時間の蓄積”、すなわち“無形のもの atmosphere”の喪失であったはずで、伊吹氏は、形にならない数多くの大切なものが、上図西田家が引き倒される際に立ちのぼった埃のように空に散っていったことを、描かざるを得なかったのだと思います。

このように考えるとき、和紙と筆と絵の具という素材とは異なりますが、私たちが京焼を対象に行っている記録調査の底には、伊吹氏の衝撃と重なるものがあると感じています。

I . 京焼の登り窯を3D測量で記録する試み — 新しい調査法の紹介と展望

開発の足音が高まるなかで、実際に窯焚き操業が停止している以上、今後もしだいに失われていくであろう京焼の登り窯遺構を、(市街地のなかにもあり緊急性の高そうな五条坂から)現在可能な限りの最高精度での記録保存調査(写真による精細な3D測量)しましょう、という相談を早稲田大学の有志側から木立さんに持ちかけたのは、2017年夏のことでした。

翌春からの調査計画も少しずつ立ち、いよいよこれからと思っていた矢先の2017年冬、五条通を南北から挟むように残っていた浅見五郎助窯と井野祝峰窯の解体取り壊しが、あいついで決定的になりました。そもそもの調査対象と考えていた窯が、測量を目前にして失われてしまったわけですが、その秋に申請していた文部科学省の科学研究費はそのまま採用されて、2018年度春からの調査費用が確保されたことは、私たちの対応の鈍さを鞭打つようなどこか皮肉な結果でした。

そこで、現存する京式(京焼系)登り窯のすべてに対象を拡大するという方向転換を経て、来年度までの計画で、以下に紹介する5基の窯の3D測量を少しずつ進めています。

1. 京都郊外の京式登り窯

①石黒宗麿窯

石黒宗麿(1893-1968)は、戦前期から活躍した近代陶芸家のなかで、とくに中国陶磁の技法再現に尽くし、晩年は中国・朝鮮・日本の古陶を踏まえつつ「卑俗を排した」風格と個性のある作品を生み出したと評されます。重要無形文化財保持者(人間国宝)制度が始まった1955(昭和30)年には、「鉄釉陶器」保持者として、荒川豊蔵・富本憲吉・濱田庄司らとともに認定されています。出資者がついて蛇ヶ谷の借家暮らしから1936(昭和11)年に移住し、終の棲家とした八瀬の「石黒陶窯」には、自宅、工房、茶室、庭、畑、連房式登り窯、錦窯などの小型窯群、作業小屋などがしだいに整備されました。現在、京都精華大学の管理下にあり、茶室や作業小屋・生前の窯覆屋は老朽化により失われましたが、自宅、工房、窯が保存されています。



図7 石黒窯の埋もれた胴木間の検出 *K



図8 3D写真測量のための特別な撮影法

石黒陶窯の登り窯（図7）は、1943（昭和18）年、南西に隣接する山林を買い取って広げた際に移築し、初期の窯を「横半分」（石黒書簡）に詰めたものです。全長約7.5 m、全幅約1.7 m、各房の内寸は一の間～三の間ともほぼ等しく、幅約1.2 m、奥行き約1.1 mを測り、素焼用の捨て間とされる四ノ間は、わずかに小さ目です。炎の通り道の確保と、窯詰め時の人の動きを考えると、これ以上小さくできないほどで、京式登り窯のミニマム・サイズと言って良いでしょう。それでもこの窯は、岡田さんのまとめで紹介される近代の「五条坂における京式登り窯の特徴」を、ほぼ踏襲したつくりになっています。とくに、町家の敷地が短冊状になり窯の傾斜の土台を人工的に築造する必要がある五条坂と異なり、自由に自然地形の傾斜を活かせるこの地で、わざわざ地面を掘り下げて胴木間を設置しているのも、面白い点です。

この京窯の元の覆屋内には、しだいに上絵付用の錦窯のほか、楽窯、灯油窯、電気窯などが、石黒の作陶探求に応じて付設されたことが、今回の調査結果や古写真からうかがえました。

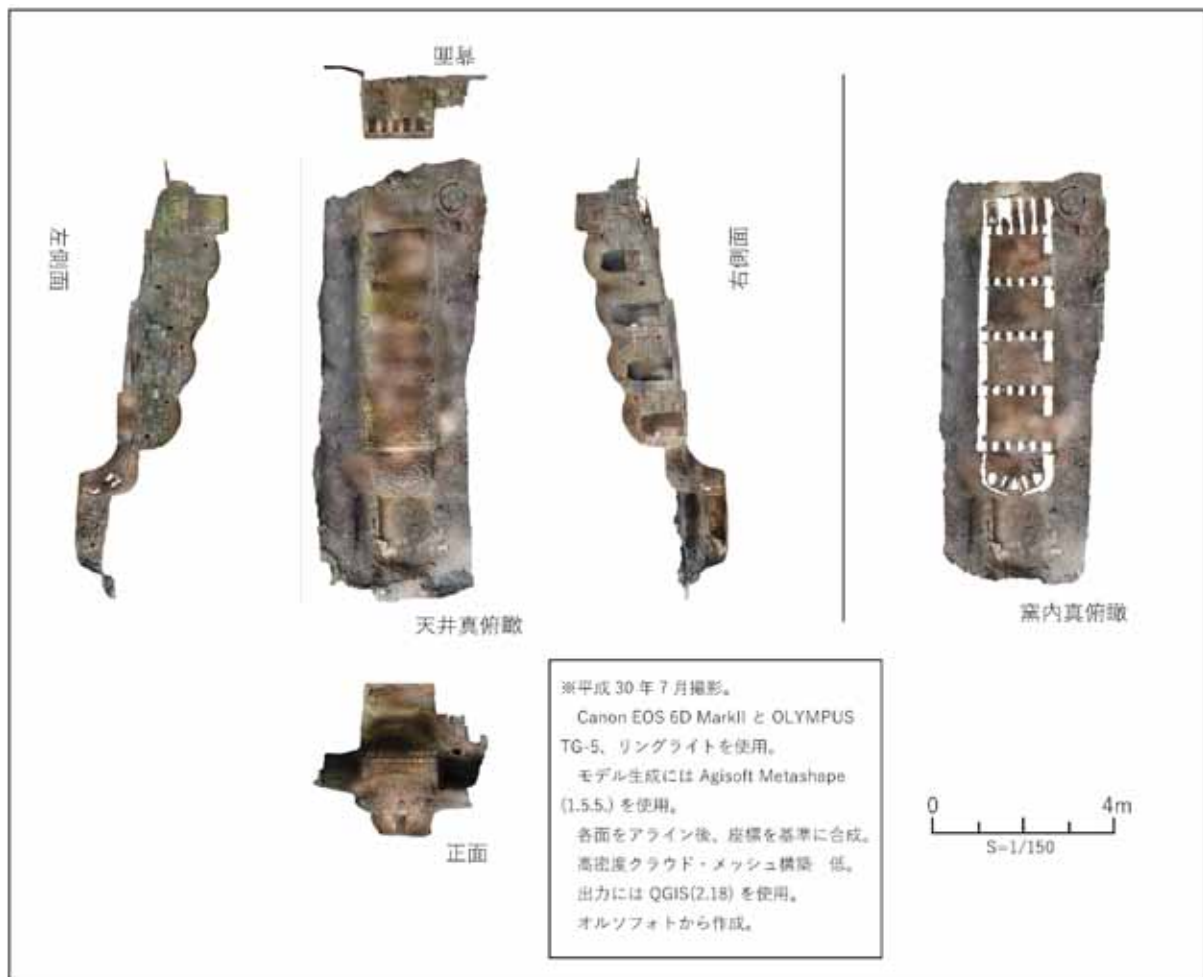


図9 石黒宗磨窯 オルソ画像（1：150）（ナワビ矢麻・田畑幸嗣 作図）

②上田恒次窯

上田恒次（1914-1987）は、河井寛次郎に入門し、白磁や呉須、辰砂、練上などを得意とした民藝派の陶芸家、自宅や「松野鰻寮」で知られた建築家です。後に、京都民藝協会の会

長もつとめました。京都市第二工業学校陶磁器科を卒業した上田は、陶芸家を志して岩倉木野に土地を購入し、竹藪を切り開いて、自らの設計により登り窯と自宅を築きました。丘の斜面上部には木部ベンガラ塗りの民家風母屋、麓には工房・応接室を備えた長屋門や檜皮葺の納屋が並び、その間の庭園の東隅に登り窯と優雅にカーブする瓦屋根をもつ覆屋が立ち並ぶ姿は、細部まで気配りの行き届いた民藝風の建物内装とともに、作家の理想郷となっています。その住宅主屋と登り窯は非公開ながら、2006年、国の登録有形文化財（建造物）に指定されました。



図10 旧上田恒次家住宅主屋



図11 上田恒次窯と瓦葺き覆い屋

上田家に残された「陶磁器窯設計変更許可願い」からは、1936～37（昭和11～12）年ころに築かれた最初の登り窯のようすが伝わります。現在地とは異なり、母屋のすぐ東側に接して東西方向に築造された4房の登り窯で、最終的に「高サ五尺七寸 巾七尺四寸 長二十三尺七寸」と申請されています。斜面中腹にある南北方向の現在の窯は、1942年頃に母屋を東側に増築した際に移築したものと考えられます。この窯（図14）は、全長約6.5m、全幅（外寸）約2.3m、各房の内寸は幅約1.8m、奥行きはややバラバラで、一の間～三の間の順に約1.1m、約1.0m、約1.2mを測ります。四の間は不詳ですが、他の房に比べ奥行きが狭いことは外観から間違いないでしょう。移築前の窯と比べると、全長はやや短く、幅はやや広がっています。

また、移築前の窯は、付図によると全ての房が横狭間穴構造ですが、現在は、一の間～四の間をつなぐ狭間はすべて縦狭間構造になっているようです。これは京式登り窯では異例で、その構造の由来や採用理由は非常に興味深いことです。



図12 狭間穴の吹出し口（縦）



図13 狭間穴の吸込み口（横）

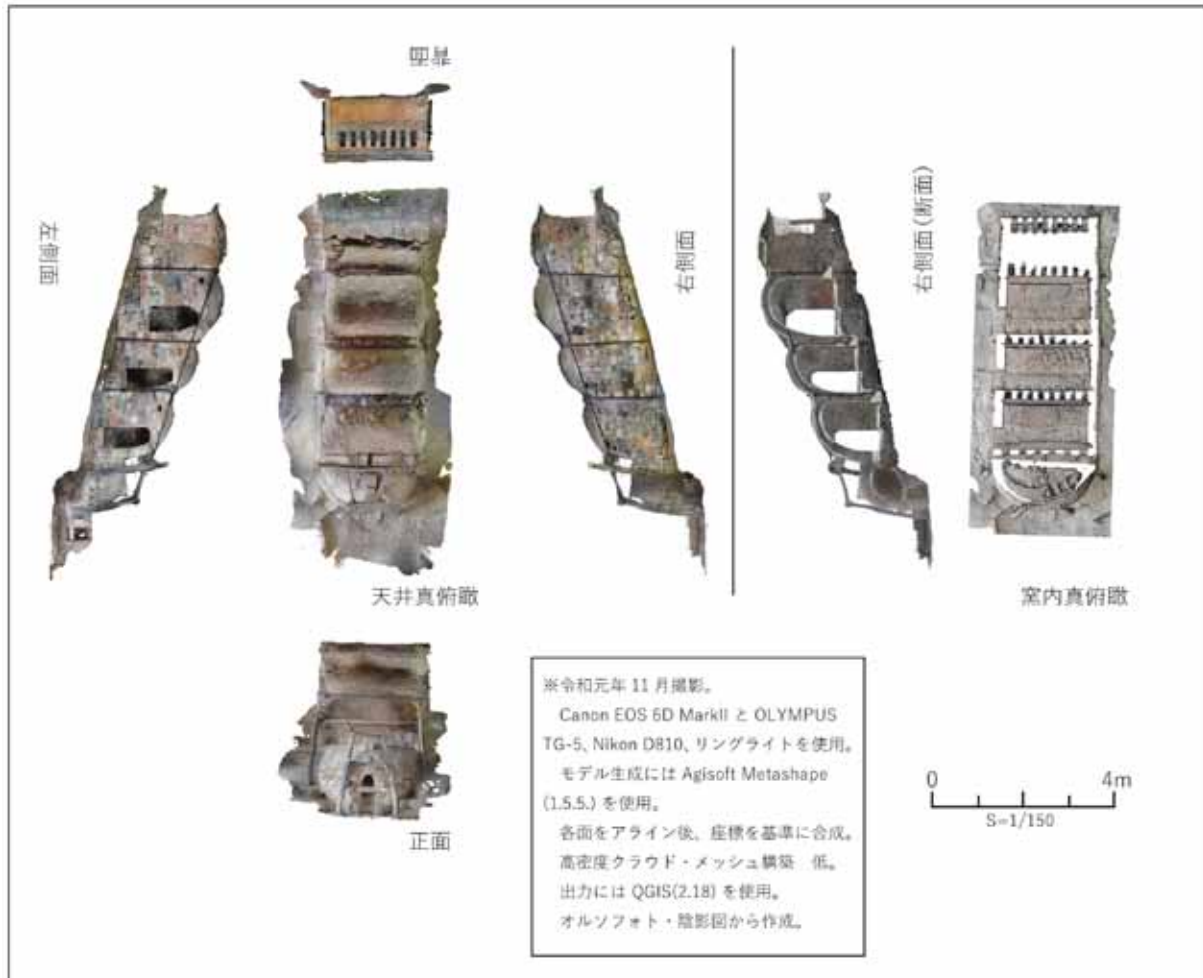


図 14 上田恒次窯 オルソ画像 (1 : 150) (ナワビ矢麻・田畑幸嗣 作図)

上述の石黒宗麿窯と上田恒次窯は、京焼の中心地からはるかに離れた郊外にあり、京焼に一般的であった借り窯・貸し窯慣行と無縁な、個人作家の専用窯でした。そのためでしょう、「五室乃至九室を普通」「平均八室」で、その幅は「大体一室内を十三立^{たて}前後（一立を棚板の短辺の一尺とみて、全幅で4メートル以上）」（京都市社会部 1940）と報告される、同時期の一般的な京式登り窯のサイズに比べ、非常に小さいものになります。

2. 五条坂の京式登り窯

①小川文齋窯

小川文齋は、現在は六代目が継ぎ、江戸期に清水坂で製陶に従事したとされる京焼の代表的窯元です。五条坂北側に面した邸内の最奥部には、全長約 11.5 m の 6 房をもつ登り窯が大切に保存されていますが、隣地のホテル開発に伴う重機工事の震動により 2018 年 3 月、登り窯やレンガ積み煙突にヒビが入り、窯の一部が崩落、煙突も傾くなどの被害が出ました。修復と併行して 3D 測量を行ったこともあり、技術的に困難な点が残る、今回は報告を割愛します。

②河井寛次郎窯

河井寛次郎（1890-1966）は、東京高等工業学校窯業科を卒業して、京都市立陶磁器試験場の技手となり、釉薬研究に没頭します。その後、京都五条鐘鋳町の清水六兵衛の窯を譲り受け、30歳で独立しました。意外と知られていないことですが、民藝運動に身を投じるようになる以前の段階、1920（大正9）年から1924（大正13）年頃までの初期の作家活動は、中国や朝鮮の古陶磁に倣った作品の発表から出発しています。この時期の河井の展覧会は成功を収め、その釉薬、成形技法、窯焚きの冴えは高い評価を受けました。



図 15 河井寛次郎窯 オルソ画像（1：150）（ナワビ矢麻・田畑幸嗣 作図）

河井寛次郎窯は、全長約 14.9 m、全幅（外寸）約 5.0 mを測る全 8 房の登り窯です（図 15）。その大きさは、前述の『京焼陶磁器業に関する調査抄 中間速報』（京都市社会部 1940）にて報告された京式登り窯の規模やサイズに、ほぼ適合しています。本稿で紹介する 5 つの登り窯のなかでは唯一自由に見学することができますし、作業時に近い保存状態や、その構造・大きさからみて、近代の京式登り窯の典型を伝える代表的遺構と断言していいでしょう。

河井は、初期の自らの作陶の在り方に疑問をもち、作品をほとんど発表しない沈黙の期間を経て、民藝運動の中心人物のひとりとして「用の美」の作陶が花開く中期に入ります。京焼の中心地に暮らしながら、その独自の作陶歴や哲学により京焼関係者からは敬して遠ざけられた面もあるようですが、河井が経営した鐘溪窯は、なお京焼の貸し窯・借り窯慣行のなかにとどまり続け、京焼と関係を持ち続けたことを、木立さんが明らかにしています（木立 2015）。

③元藤平陶芸窯

唯一いまだに 3D 測量に着手できていない、五条坂所在の登り窯です。

正直、全 9 房で全長約 19 m、全幅約 5.5 m を測る偉容と、窯体の周りに乱立する覆屋支持材の多さと複雑さから、撮影とデータ結合処理の難度が明らかに高いため、有効な方法を模索しているところです。



図 16 元藤平陶芸窯の胴木間と一の間・二の間

文献資料にみる限り、京式登り窯で最大級とされる元藤平陶芸窯を、とくに現状のように支持材が多くなって全体が見通しにくくなってしまった状況下で、3D 測量により窯体をモデル図像として扱えるようにすれば、他の京式窯と同水準で比較できるだけでなく、教育や観光資源への活用意義も大きいでしょう。

3D 写真測量の利点と今後の新しい研究法への応用

使用したソフトは Metashape で、デジタル写真から測量と 3D 空間処理を行うものです。

- ・利点と応用 1：従来の手計り測量より相対的に測量精度が高く、短時間で済みます。
 - ・利点と応用 2：データの写真から、立体構造のみならず、色情報が表現できます。
 - ・利点と応用 3：3D 化により、細かい凹凸や不可視的な内部構造を再現できます。
 - ・利点と応用 4：データを選択すれば、対象周囲のノイズを除外したモデルを作成できます。
- 現在、3D データをもとに、関係者に聴き取りする新しい調査法を模索中です。

II. 京焼の生産空間を記録する試み — その「生業」「暮らし」の世界をどのように残すか？

次に、岡田さんの報告に登場する「入江道仙窯」を含む、入江道仙家居宅と家業に関連する諸施設が構成した魅力的な京焼関連空間「道仙ロージ」に対して試みた、文化人類学（民俗学）と民俗建築学の共同調査アプローチをご紹介します。近代産業遺産を考えるにあたっては、施設自体の保存とともに、施設を築き維持・利用してきた関係者の思い（記憶）の保存と共有が必要です。筆者は、つい最近失われてしまったこの「ロージ」を、近代に成立した職人長屋、近代都市・京都における手工業生産と職住接近の生活を探るにあたっての希少例と捉え、その記録保存によって空間の成立と変遷を考察することができたら面白いと考えています。なお、このロージに関しては、木立さんらがまとめられた『道仙科学製陶所窯跡第5次発掘調査成果報告』（2012年）に、詳しい成り立ちの分析が出ています。今回の紹介もその成果を下敷きにしていますので、関心がある方は、ぜひそちらの報告書もご覧ください。

1. 「道仙ロージ」の空間的成立と建築

入江家が五条坂で窯業に関わるのは、江戸期からとされます。安政3（1856）年に家督を継いだ2代道仙は、明治4（1871）年には京都舎密局、明治11年には大阪造幣寮に出入りし、貨幣鑄造用坩堝の製造に成功します。以降の道仙窯は、「石もん」と呼ばれる磁器のなかでも特殊な理化学容器の生産に携わり、装飾陶磁器・食器・茶器が主流の京焼では異色の蒸発皿、乳鉢、漏斗、坩堝などの化学磁器を主力とする草分け業者としての道を歩みました。

明治26（1893）年2代目の死去により3代道仙の時代になると、入江道仙家所有の居宅と生産諸施設は、道幅が狭かった旧五條通を挟んで南側と北側に分かれ、最盛期に入ります。

南側敷地（五條橋東四丁目447番地、114坪）がもともとの本拠地であったようで、防火地帯づくりを目的とした戦時中の建物疎開によって破却されるまで、入江道仙家の事務所・居宅としての表店（図17：心象図）、坪庭を隔ててその奥に土蔵と物置、さらにその奥の敷地の最南端に、手廻しロクロ2台、機械ロクロ2台を置いた2階建ての「工場」や、空き地に置き上家をかかけたトロンミル（石類や顔料の粉碎・調合に使用される微粉碎機）などから構成される「第一工場」がありました（昭和18年「陶器製造工場分割許可申請書」記載内容より）。



図17 伊吹弘「強制立ち退き前の五條坂南側心象風景」第2・3扇（部分、1983年制作）

早くに失われたこの南側空間に対して、北側敷地（五條橋東四丁目 448・449 番地）には、2018 年に東半分が更地になるまでの約 1 世紀以上にわたり、奥に通じる小径を軸として、表店の店舗、奥の長屋、倉庫、登り窯、工房などからなる「道仙ロージ」がありました。

①「道仙ロージ」の成立期（明治 10～30 年代）

北側 448 番地の土地約 140 坪は、3 代目の相続以前から入江家の所有だったことが、明治 14(1881)年の「證書」からわかります。道仙ロージの西半にあたる土地の当時の建物は詳らかではありません。さらに明治 15～16 年の「賣渡し証」から、北側に接続する台形の開墾畑・約 50 坪（478-5 番地）を買い取っています。

ここで興味深いのは、この買い足し部分が 449 番地の北側にも及んでいることで（図 18）、この時点で明らかに 449 番地の利用も考慮されていたようです。これに関連して、3 代目相続直後の明治 26（1893）年 11 月、449 番地（約 190 坪）を借地していたと思われる塩竈家から建物を買いとった際の「建物圖面」（図 19）が伝わ



図 19 明治廿六年建物圖面 *K



図 18 昭和 2 年頃京都市明細図

ります。現存する表店（旧楽只苑店舗）とも推定される「本屋瓦葺二階造」

の他、その裏側（北）には「平屋造瓦葺」大小 5 棟が描かれていますが、位置・形状・建坪が近年まで遺存した建物と異なります。したがって、449 番地に建設された平屋の長屋や登り窯は、明らかにこの時期を下ることになるでしょう。なお、上記明治 14 年の「證書」に 449 番地の地主は谷口家とありますが、明治 30（1897）年に下京区長に出された 448・449 番地の「地券訂正申請」では入江家のみ署名となっています。

これらを考え合わせると、入江家は明治 15～30 年頃に、しだいに五條通北側の建物や土地を買い広げたようです。推測を交えれば、明治 10 年代に化学磁器製造の立場を確立した道仙窯は、南側敷地での生産が手狭になり、新たな工房と自前の登り窯の建設地を求めて、急速に北側の建物・土地（計約 380 坪）の買収を進めていたようです。

②昭和初期の「道仙ロージ」

図 20 は、入江家に遺された 1/200 「実測圖」 から、昭和 19（1944）年頃の道仙ロージを一島政勝さんが製図したものです。南の五條通に面して 2 棟の二階建町家 A・B があり、その間は二階が住居のトンネル状通路です。奥（北）に入ると、右は原図に「工場」とある平屋の長屋 C、左は二階建 6 戸の棟割長屋 D、その奥左に二階建 2 戸の長屋 E がありました。

さらに奥の不整形地 98 坪分は「第二工場」とされ、北上がりの斜度をつけた基壇に築かれた六ノ間の「本窯」（岡田さん報告の道仙窯）、本窯と同様に垂鉛鋼板で葺いた上屋のかかった「角窯」（石炭窯）、互いに連結する木造瓦葺き平屋の「工場」（物置）2 棟と 4 台のロクロあが設置された「工場」（工房 F）などで構成されていました。ある時期までは、長屋群との境目に門扉も設置されていて、ロージの中で独立したエリアを形成していました。

このうち長屋 E および石炭窯とその煙突は早くに撤去されて新しい建物に建て替わり、登り窯は老朽化を理由に一時期は崩して埋められた状態でしたが、その他の建物は一部に改装が施されたものの、おおむね 2018 年頃まで路地空間の全体像が残っていました。これは、入江家が窯業者でなくなった後も法人として存続し、化学磁器仲介のほかは、不動産賃貸が主となったことに起因すると思われます。入江道仙個人が道仙化学製陶所から家賃を受け取る昭和 40 年代の「領収通（帳）」も残されています。

私たちが「道仙ロージ」とよぶ、表店 2 棟、棟割長屋 2 棟、工房、物置、登り窯（跡）などから構成されていた路地空間は、残念ながら、その成立時期が十分には特定できません。ただし、後述するいくつかの史料や関係者の語りから推測される状況からみて、明治 30 年代頃から大正期には成立していたとしていいと思います。

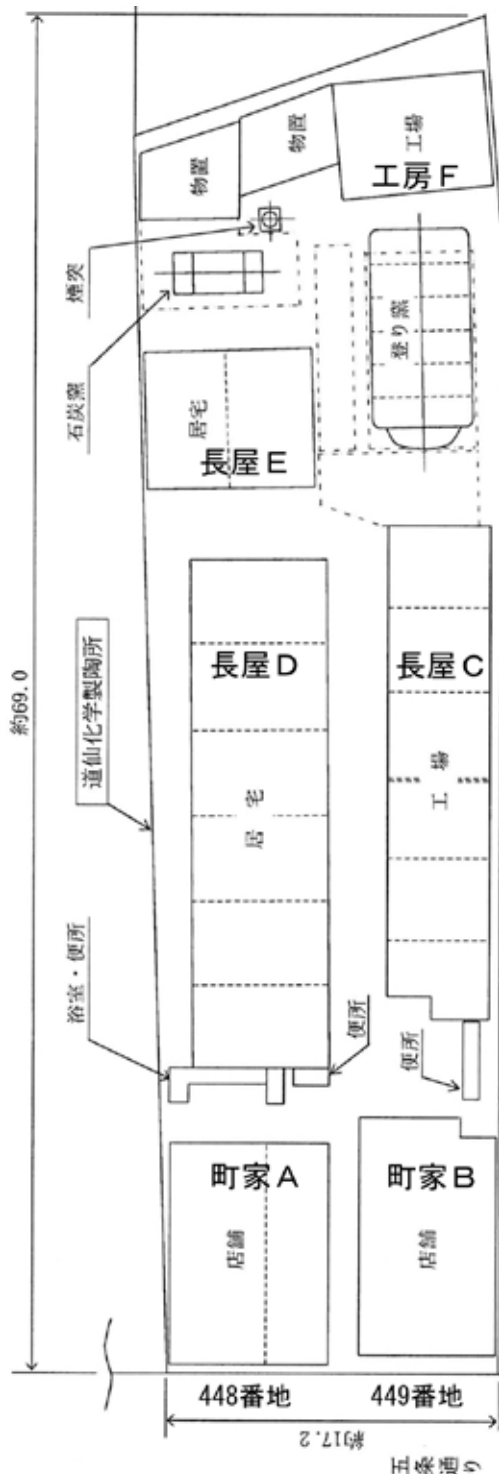


図 20 昭和 19 年頃の道仙ロージ

2. 入江道仙ロージに暮らした人々と生活—長屋・工房の建築野帳と語りから

①京町家A・B（二階建ての表店）

戦前は貸店舗で、やがて南側にあった入江道仙家の居宅と事務所が移動したようです。戦中の昭和18（1943）年に国策で法人化した「（有）道仙化学製陶所」は、戦後の化学磁器において急速に進んだ製作技術の高度化のなかで、昭和29（1954）年から売り上げの伸びが止まり、昭和43（1968）年の窯焚きを最後に窯業者としての終焉を迎えました。この時期以降、表店は、たばこ販売店や、昭和40年に創業した京焼と全国著名窯業地の窯元・作家物を扱う「楽只苑」（湯浅商店）の店舗として賃貸利用されたため、本稿では説明を省きます。

②長屋C（平屋）

昭和19年の「実測圖」では、「木造瓦葺平屋建（工場）」と表記され、6区画に分かれている棟割長屋状の細長い建物です。近年まで、外壁を鋼板で覆って楽只苑の倉庫として使われていました。向かいの二階建て長屋Dが「居宅」と表記されていることに比べ、「第二工場」エリアの外側であるにも関わらず「工場」とされていることが気になりますが、この長屋Cのものと思われる古写真が『五条坂陶工物語』に掲載されています（図22）。これを見る限り、居宅としての長屋のつくりに思われます。



図21 掲載写真「かつての職人長屋」

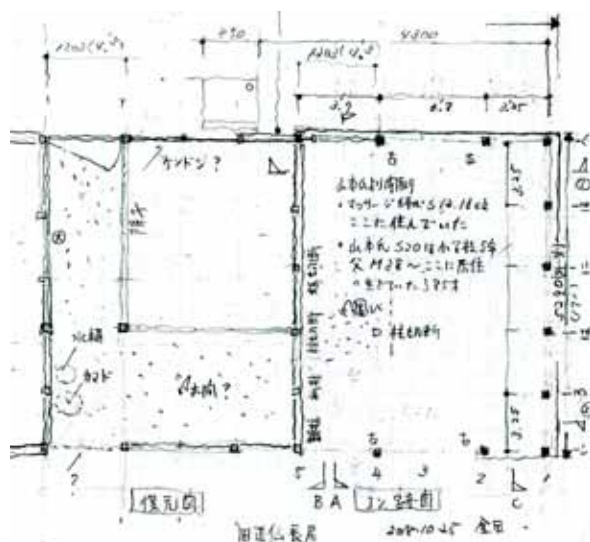


図22 長屋C一部平面図（金田正夫採集）

そこで、2018年にこの建物が取り壊される間際、共同調査のメンバーで建築家・民俗建築研究者の金田正夫さんに、構造調査に入っていただきました。楽只苑の商品倉庫に転用されていた期間に大きく改装・補強され、古い時期の部材も少なくなりましたが、ところどころに残る古い柱や梁に穿たれた接合の痕跡から、建築当初の姿を復元していく手法は、まるで推理小説のようでした。

この調査からわかったのが、小さな間取りの長屋のようすです（図22）。この図は、右側が実際の接合痕跡をメモした建築野帳で、左側がその場で復元した間取り図になっています。これによりますと、ロージの通り側（図の上側）に面した出入り口から入るとトオリニワの土間で、左手に障子で仕切られた四畳半の座敷があり、奥（東）に入ると、そのまま土間が左にL字状に広

がるというつくりです。もちろん、便所は室外の共同です。残念ながら、土間にどのような設備があったのかまではわかりませんでした。町家の建築調査例でも見たことのない珍しい間取りで、当時はメンバー内で議論になりました。

その後、さまざまな資料を調べていくうちに、同様な間取りで暮らし、働いていた昭和初期の「陶磁器職工」の姿が浮かぶようになりまして紹介しましょう。ひとつは、京都市社会部が調査作成し昭和 15（1940）年に発行した、『京都陶磁器業に関する調査抄 中間速報』と題された粗末な紙にガリ版刷りの冊子です。その 1 章 2 節「京焼陶磁器業の生産様式」のなかに「工場の規模及び一般的形態」の項があつて、職場と住居が同一棟にあるものが 43 %、職場が 3 坪以内となるものが 28%とされ、「一部、二部業者、職場住居図、小規模なるもの」として図 23 が、紹介されています。「一部」とは美術品、「二部」とは日用品を扱う当時の製作部門分類を示す用語です。図の住居部分の大きさは不明ですが、「ロクロ」と（成形した製品を置く）「棚」、隅に「施釉場」がある部分は、トオリニワから続く L 字の土間となっているようですから、まさに金田さんの復元図と適合します。

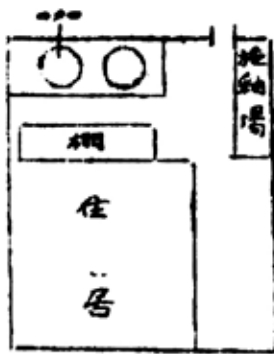


図 23 職場住居図

この項の末尾は、「之等の職場は一般に室内の湿気高く、その採光設備の点に於ては、大半以上は全くの不備を極め、其の狭雑、土埃、或は地帯を覆ふ登り窯の煤煙等は何等の改造の要ありと思はれる」との記述で締めくくられます。この調査が「多分に封建的残滓を現今に迄持ち越し、未だ小規模家内工業生産組織下に置かれてゐる」ことを問題視し「社会政策的見地」から行われたことを考えれば、「改造するの必要をも通感する」状態と認識されていたことが伺われます。

また、京都府労働経済研究所が調査し昭和 27（1952）年に発行した『社会医学の立場から見た清水焼陶磁器関係者の生活の実態』の 3 章 3 節には、「住居の状況と住い方」の調査報告があります。「自営業者の住居」として、「調査世帯 105 戸から 84 例を採出して観た所、52 例が住居外に、32 例が住居内に作業場をもっている。（中略）中でも、零細な経営規模の世帯に多い」と記述し、衛生的に問題視しています。作業場の位置で住居の型を 3 通りに分け「一列型」として簡便に図示されるのは、土間のトオリニワの横に座敷と仕事場が並ぶ形です。

これらの資料は、戦中から終戦直後の頃まで、陶磁器生産に関わる職工の仕事と生活のミニマムな形が、一部屋の居室と作業場の土間が組み合わさった職住一体型であったことを、私たちに教えてくれます。関連して、道仙ロージに子どもの頃から暮らし、桐箱職人としての家業を継いで工房として近年まで長屋 D を使っていた、昭和 9（1934）年生まれの山本さんが、以下のような話をしてくださいました。

両親と幼い兄はしばらく平屋（長屋C）に居て、二間で狭いので私が生まれる前に二階屋（長屋D）に越した、と親から聞いてます。平屋の北端にはマッサージ師が住んでいたけれど、あとの部屋は（道仙窯の）薪割り木や製品を入れたり。物心ついた頃には、すでに人が住んでいなかったの、中を覗いたことはありません。（20200204 取材）

入江家の建設意図をうかがい知る資料は未見で、明治後半・大正期の実態も不明ですが、これら史料や語りからわかるのは、駆け出し職人や独身者、子どもの幼い若夫婦であれば、昭和初期までは、この間取りに暮らしながら、その中で職人として仕事をしていた、ということです。ところが、職住一体のその狭さと暮らしにくさから、職工全体からみてもそのような暮らしに甘んじる割合はしだいに少なくなり、建物が少し古くなってくると、道仙ロージのように居宅機能を失い倉庫に転用される場合が多かったのでしょうか。入江家に残る文書に「工場」とあるのも、建築当初はそこで作陶するように設計されていた名残りかもしれませんが、「昭和18年度決算書」には、すでに倉庫7戸として50圓の借料が計上されています。

③長屋D・E（二階建て）

長屋Cが居宅機能を失っていったのに比べ、一階に二部屋（四畳半・六畳）、二階に二部屋（四畳半・六畳）、加えて裏庭へ便所・風呂、二階へ物干し台を増設するスペースがある、典型的な京風小長屋D・Eには、居住者が定着しました。道仙窯の経営が安定していた昭和初期の住人は、概ね判明しています。図24は、戦前期の五條橋東の姿を回顧した本多孝之助の『思い出の五条坂』掲載図から、道仙路地周辺を抜粋したものです。図中右方を縦に走るのが旧五條通で、右列が建物疎開で失われた南側家並み、「ロージ」とある部分が道仙ロージになります。

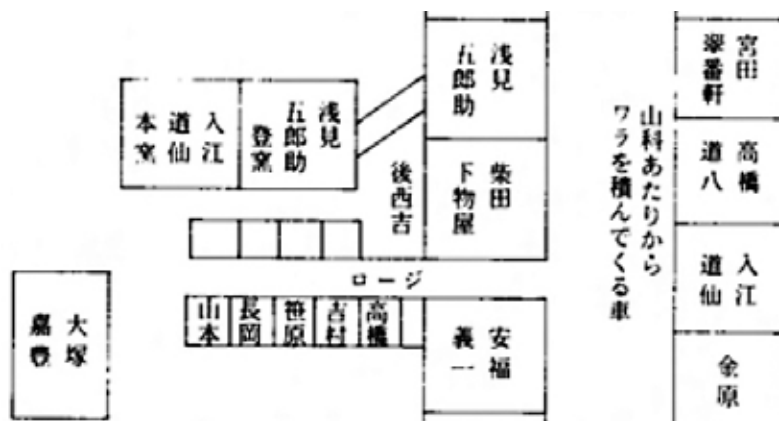


図24 「昭和十年頃」復元図

路地奥については、位置関係がやや不正確で一部に省略が見られますが、当時の入居者の状況をよく伝えています。路地を挟む道仙所有の町家A・Bは貸し出され、ロージに入り上（東）側の平屋長屋Cは居住者名が空白で、すでに倉庫になっていたようです。

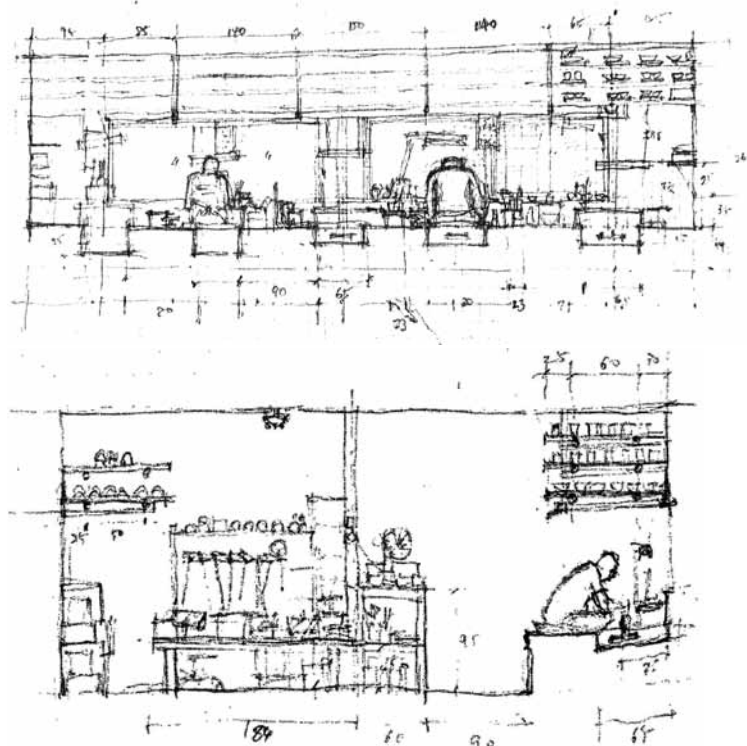
ロージ下（西）側の長屋Dには5軒分の居住者が記されています。このうち左（北）から順に山本さん（男）は桐箱職人、長岡さん（男）は大工、笹原さん（男）は道仙窯の衰微期に成形技術の中心を支えた熟練ロクロ師、吉村さん（女）は入江家の台所・事務手伝いや漏

斗の穴開けなどの下働き、高橋さん（男）はホテルのコック、右（南）端の空白は道仙窯の事務所にあたる部分です。また関係者の語りによれば、図 24 には描かれていない二軒長屋 E は、手前が入江家手伝いの清水さん（女）、奥が道仙窯の「走りまわり」をしていた佐々木さん（男）で、亡くなられた後は平野さん（女）が入ったと伝わります。このうち平野さん・清水さんと高橋さんの妻は三姉妹で、その縁で集住したものと思われます。これらの住人は、道仙窯の操業停止後も、概ね平成期まで居住を続けていました。

このように、五条坂という場所柄からか、道仙ロージは、陶磁器・茶道に関連の深い桐箱製造、近代都市・京都を支える大工・コックなど、手間賃仕事の職人層に広く開かれていました。店子を必ずしも道仙窯関係者に限らない経営は、家業の盛衰に家賃収入が連動しない点で安全ですが、二階長屋 8 軒中 5 軒が道仙窯と関連深いテナントという点では、必ずしも高額ではなかった賃金で居住できる福利厚生的一面も持ち合わせていたといえるのではないのでしょうか。

④工房 F（「第二工場」内）

さらに図 24 の路地奥には、「大塚」「嘉豊（陶苑）」の名が見えます。この当時、大塚氏の経営する嘉豊陶苑は、道仙所有地東隣の浅見五郎助敷地内に 60 坪ほどを借地して工房を設けていました。聴き取りによりますと、4 代道仙が経営に苦しんでいた昭和 43 (1968) 年、北側敷地のうちほぼ 478-5 番地にあたる工房 F や物置の約 40 坪分を、入江家の依頼により買い取っています。嘉豊陶苑は、明治 35 年の創業で、おもに土産物の清水焼や料亭食器の「土もん（陶器）」を作る窯元でした。昭和の最盛期には 2 つの工房で家族・職人計 9 人ほどが働いていましたが、平成期の度



重なる不景気のなかで工房 F に生産を集約し、令和に入ってからホテル開発を機に廃業しました。

この工房内（図 25・26）は、天井に近い棚板から床まで、多数の商品サンプルやその大きさを決めるトンボ、道具の絵筆などが溢れるように並ぶ、大変魅力的空間でした。その様子を活写した、共同調査メンバーで建築研究者の黒石いずみさんの建築野帳を紹介します。

図 25・26 工房 F 内部立面図（黒石いずみ採集）

近代産業（京焼の世界）を記録する意義

入江道仙は、明治以降、京焼では特異な化学磁器の先駆者として財を成し、居宅・店舗のほか、事業の中心となる窯・工房・倉庫等で構成される「工場」と、個人資産の賃貸長屋群から成る「道仙ロージ」を形成し、近代京焼の有力者のひとりとなりました。「乳鉢の道仙」として名を馳せたものの、五条における生産規模や登り窯による焼成方法は、他の窯元と変わることなく、戦後、化学磁器の技術革新に対応できないまま生産者としては衰えました。

その一方で、道仙ロージは、なお半世紀の寿命を保ちました。その二階長屋は単なる賃貸住宅ではなく、職住接近・社宅型の「近代職人長屋」としての厚生機能を帯びていて、京都の伝統的手工業職人の姿として一般に想起されるような「居職」の生活空間とはまた異なっていたようです。加えて町家や工房は、その地域の重層的な経緯のなかで、所有者やテナントは替わっても「京焼に関する歴史的空間」としての施設性格を十分に維持しました。

- このように考えると、近代産業を記録する意義は、以下のようなものになるのでしょうか。
- ・先人が伝統と海外技術を融合しながらつくった施設やシステムは、「近代」理解の資源です。
 - ・京焼の場合、歴史的で最先端の消費都市の工芸品のあり方に、都市構造の一端が現れます。
 - ・歴史的な重層性をもつ近現代の施設（産業遺産 Industrial Heritage）は、その素材や造形自体の存在感・空間性に、地域の記憶を呼び覚まし活性化する力があります。
 - ・合わせて、その施設を築き維持・利用してきた関係者の思い（記憶）の保存と共有があつてこそ、その施設（遺産）の意味は真に理解されるようになります。人々の語りや史料の収集と記録保存は、施設の保存と同じように重要です。

→ 1996年の文化財保護法改正により本格化した国の「近代化遺産」の概念は、施設の重要文化財指定に集約される傾向が強いですが、本来は、社会（地域）のシステムと当時の技術水準への知見のなかで理解されなければなりません。残された今後の課題です。

おわりに

空襲でほぼ丸焼けになり、昭和初期以前の“都市像”を失った東京の人間から見ると、都市としての「京都」は、あらゆる空間に時間の蓄積を感じます。有名寺社の建築物等をはじめとする古代・中世・近世の遺構はいうに及ばず、近代以降、明治・大正・昭和期に形成された日常的なもの、ただの道（辻子、ロージ）にすら、そこに暮らす人々も、どこか重層的な歴史の色を帯びています。ときにその歴史性は、京都の方には伝統という名の重苦しい軛に感じられるかもしれませんが、それがあっけなく喪失していく様は、東京人には驚きの連続でした。

京都の諸空間は、世界的に見てもかけがえのない“空気 atmosphere”をまとった、極めて魅力的な場です。ただ、空間のもつ薫りは姿もなく移ろいやすいので、ちょっとした嵐がくると吹き飛ばされてしまいます。私が京都五条に間借りした2013～14年の冬からの6年間に限らず、過去いくつもの時期に、京都のさまざまなアトモスフィアは失われ続けてき

たことでしょうかから、京都の方にとっては「またか」という気持ちかもしれません。しかしながら筆者は、ゴジラの来襲によってTOKYO（仮想空間としての東京）が2度目の都市破壊にさらされたように、京焼という京都を代表する都市工芸を支えてきた空間すら喪失していく現状に、京都に襲いかかっている“怪物”の正体はなにか？と、考えを巡らさざるをえません。

わずかでもそれを記録しておこうと考えた余所者の目の前をかすめて、（幸運の女神の前髪をつかめないまま）さまざまな“空間”が消えていきました。本発表は、その失望のなかで重ねているわずかな“抵抗”について、駄文を連ねました。みなさまのご叱正を乞うたいです。

注記と謝辞

本調査は進行中で、これから調べるべきことや、未整理の調査資料もたくさん抱えています。そのため、本稿の考察はまだ中間報告にすぎません。文中に用いた写真には、筆者の撮影によるものの他、木立雅朗さんの提供によるもの（*K 注記）が含まれます。京窯の3D測量図の作成では、とくにナワビ矢麻さんに負担をかけました。末尾となりますが、このたびの講演、本稿の執筆機会を与えて下さった京都市考古資料館の山本雅和さん、立命館大学の木立雅朗さんに、深く感謝いたします。

引用参考文献

- 石川祐一 2010「上田恒次郎」『民芸運動と建築』淡交社、92-99.
- 一島政勝 2006「登り窯の歴史と現在」『京焼と登り窯—伝統を支えてきたもの』文部科学省 21世紀COE（立命館大学）近世京都手工業生産プロジェクト 144-179.
- 射水市博 2000『石黒宗麿をめぐる人たち—京都八瀬の窯と長谷川忠夫』
- 射水市博 2001『石黒宗麿書簡集』第2集.
- 木立雅朗ほか 2015『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究報告書』.
- 木立雅朗 2020「登り窯の終焉と記憶をめぐる文化資源—五条坂・道仙科学製陶所の民俗考古学」『令和元年度 京都府域の文化資源に関する共同研究会報告書（洛東編）』京都府立京都学・歴史館、89-124.
- 京都国立近代美術館 2019『川勝コレクション 河井寛次郎』京都国立近代美術館所蔵作品集.
- 京都市社会部 1940『京焼陶磁器業に関する調査抄 中間速報』京都市役所.
- 五条坂陶栄会 1981『思い出の五条坂』（非売品）.
- 黒石いずみ・金田正夫 2020「京都五条坂北側・道仙路地の研究（2）—民俗考建築的視点からみた「ロージ」の成立と性格」『日本生活学会第47回研究発表大会梗概集』78-79.
- 藤平長一・北沢恒彦 1982『五条坂陶工物語』晶文社
- 余語琢磨 2019「京都八瀬・石黒宗麿の作陶の場の研究（1）—民俗考古学的視点から」『日本生活学会第46回研究発表大会梗概集』90-91.
- 余語琢磨 2020「京都五条坂北側・道仙路地の研究（1）—窯業史・民俗考古学的視点からみた「ロージ」の成立と性格」『日本生活学会第47回研究発表大会梗概集』76-77.
- 米田浩之・木立雅朗 2012「道仙化学製陶所窯跡第5次発掘調査成果報告」『立命館文学』627, 37-64.

京焼の登り窯を掘る ―道仙窯・浅見五郎助窯・井野祝峰窯―

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
岡田麻衣子

はじめに

江戸時代末以降、五条坂は京焼の一大生産地であり、現在も多くの窯元や卸商が建ち並んでいます。最盛期であった明治時代初頭には、20基程の登り窯が稼働していました。しかし、維持コストや煤煙問題、職人の技術継承などの理由から1980年（昭和55年）には登り窯による生産が終了します。その後、登り窯は解体・放置され現在に至ります。

2005年（平成17年）から2016年（平成28年）に立命館大学の歴史考古学ゼミ（木立ゼミ）の学生や歴史ある登り窯を後世に残していきたい・伝えていきたいという熱い思いをもった多くの有志たちによって発掘調査・民具整理・資料整理・お披露目会などが行われました。

この努力の甲斐があり、2018年（平成30年）に当時残存していた6基（道仙窯・浅見五郎助窯・井野祝峰窯・藤平陶芸窯・小川文斎窯・河合寛次郎窯）を数少ない京式登り窯の伝統を受け継ぐ近現代の産業遺産として重要な遺跡であると認識され、「音羽・五条坂窯跡」として埋蔵文化財の遺跡に登録されました。

今回は、京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行なった道仙窯・浅見五郎助窯・井野祝峰窯の調査成果をご紹介します。

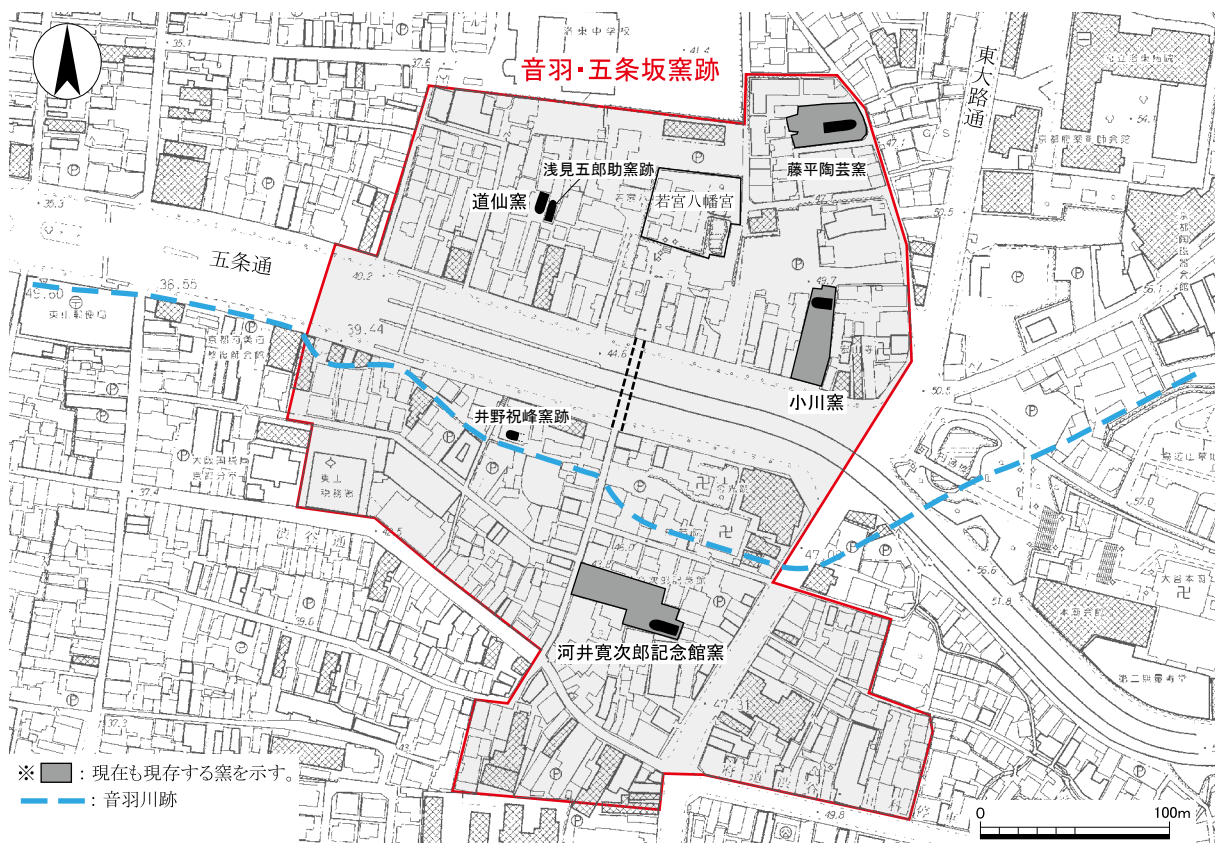


図1 遺跡位置図（1：4,000）

I. 道仙窯の発掘調査成果

1. 道仙窯の概要（表1）

三代目入江道仙によって1893年（明治26年）以降に築窯・開窯された京式の連房式登り窯です。「入江道仙窯」とも呼ばれ、1943年（昭和18年）以降には「道仙化学製陶所」という会社になります。この登り窯では、食器・花器・茶陶などの生活用陶磁器だけでなく、工業や薬品分野に使用される理化学陶磁器も生産していました。

1930年（昭和5年）以降、貸窯を行なったり、月1回は窯の焼成を行なったりと好景気でした。しかし、第二次世界大戦の影響、コストや煤煙問題、理化学陶磁器製造の衰退、職人の技術継承などの理由から1968年（昭和43年）に閉窯しました。

その後20年近く放置されていましたが、窯体の痛みが激しく崩壊の危険があったため、窯の上部は取り壊されました。

2005～2010年（平成17～22年）に立命館大学によって清掃・民具整理・資料整理・発掘調査、2019年10月～2020年2月には京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を行いました。

2. 発掘調査成果

調査の結果、道仙窯は京式登り窯の特徴をもつ窯であり、窯は大きく2回の造り替えが確認できました。立命館大学の調査によって道仙化学製陶所の事務所資料が整理されており、今回の調査結果と事務所資料から使用時期を古・中・新段階の3時期に分けることが出来ました。

また、多量の遺物（陶磁器・窯道具・耐火煉瓦など）も出土しました。

表1 道仙窯の略年表

年代	内容
嘉永5年(1852)	初代入江道仙が五条坂で陶磁器生産を始める ※窯場は不明
明治4年(1871)	禁裏御用・舎密局の御用を勤める
明治5年(1872)	文献資料における道仙の初見 丸屋佐兵衛・四ツ目仙次郎・道仙岩井屋九郎兵衛と窯を共同使用
—	2代目世襲 理化学陶磁器の生産を開始する
明治26年(1893)	3代目世襲 好景気 現場所に土地を購入 ※登り窯は記述されていない 「土地売買証明書」
明治45年(1912)	文献資料における自窯場の初見「入江道仙 現代所有者 道仙化学」
昭和5年(1930)	文献資料における貸窯の初見 浅見窯は休止しており、道仙窯を貸窯にしていた
昭和7～9年(1932～1934)	月1回、年10～11回窯焼成を行う 好景気 「伝票」
昭和18年(1943)	会社統制法 施行 道仙化学製陶所 設立 2回の大改修工事 「陶磁器製造用本窯修繕願」
昭和20年(1945)以降	五条通強制疎開・燃料不足・理化学陶磁器業界の技術高度化に対応できず 衰退 「伝票」
昭和21年(1946)	4代目世襲
昭和43年(1968)	閉窯 「伝票」・「出勤簿」

※「土地売買証明書」・「伝票」・「陶磁器製造用本窯修繕願」・「出勤簿」:道仙化学製陶所の事務所資料

①新段階（図2～4）

この時期の窯は、資料と道仙窯の歴史的背景から1960年代初頭（昭和35年頃）から1968年（昭和43年）の閉窯時まで使用されていたと考えられます。

調査開始時には、窯体の上部が取り壊されており、南から前庭部・胴木間（燃焼室）・焼成室（6室）・煙室の順に残存していました。前庭部及び胴木間は、地表面から一段掘り下げ（図3）、焼成室二の間より後ろは北上がりに造成された土台の上に築窯されています。土台は煉瓦・石・道仙窯で生産されていた理化学陶磁器を使用して造られています（図13）。また、窯の左右には作業用通路が設けられています。

この時期の窯体規模は、全長11.2m、幅4.6m。胴木間は半円形を呈し、焚口は一つ。狭間穴は「横狭間」構造、構築材にはオオゲタ・マクラと呼ばれる京都特有の耐火煉瓦を主に使用して築窯されています。焼成室の床面には棚板が貼られ、隔壁には焼成時の自然釉や耐火塗料などが付着していました（図4）。

発掘調査によって胴木間・焼成室・煙室の西側を東へ約1m縮小して造り直されていること、煙室は元々焼成室の上に設置されていたようでしたが、焼成室の後ろに造り直されていたこと、床面は嵩上げをしながら修理されており、1部屋につき2～3回程の修理の痕跡などを確認できました。



図2 新段階全景（南東から）



図3 新段階焚口・前庭部（南西から）



図4 新段階 3の間の隔壁・床面・横狭間（南西から）

②中段階（図5・6）

この時期の窯は、資料と道仙窯の歴史的背景から1943年（昭和18年）以前から1960年代初頭（昭和35年頃）まで使用されていたと考えられます。

窯体の規模は、全長10.4m、幅5.6mでした。古段階時に焚口付近に水が溜まることが問題となっていたと考えられ、胴木間を古段階時よりも約0.4m高く、北へ約1m移動した場所に造り直していたことを確認しました。また焼成室も幅は変わりませんが部屋の数が後ろに多くなったこと、それに伴い窯周囲の石垣の造り替え、基底部は古段階で使用していた正方形の耐火煉瓦の前方に割れた耐火煉瓦を配置し、床面の嵩上げなど造り直しの痕跡などを確認しました。

この時期の窯が最も大きいことから、生産量が1番多かったことがうかがえます。



図6 中段階焼成室基底部（南東から）



図5 中段階全景（南東から）

③古段階（図8）

この時期の窯は、資料より1893年（明治26年）以降に築窯されてから1943年（昭和18年）以前まで使用されていたと考えられます。のちの改修工事によって窯体の中央部分は大きく削られていましたが、前庭部・胴木間・煙室の基底部・土台となる石垣の一部が検出できました。

窯体の規模は、検出できた窯の基底部から全長9.6m、幅5.6m、焼成室は5室あったことが想定できます。胴木間は中段階時よりも約1m南、約40cm下にあり、前庭部は新・中段階のように一段掘り下げていませんでした。また、前庭部の下層には排水設備（図8）を検出しました。

窯に湿気や水気は大敵です。道仙窯は北から南へ下がって築窯されているため、雨が降った際に胴木間や前庭部に水が溜まってしまいます。特にここの地面は粘性が高く水が抜けにくいいため、集めた水を理化学陶磁器の蛇管を転用した土管で桶まで流し、その桶に溜まった水を柄杓などで排水していたと考えられます。



図8 古段階 排水設備（南西から）



図7 古段階 前庭部（南から）

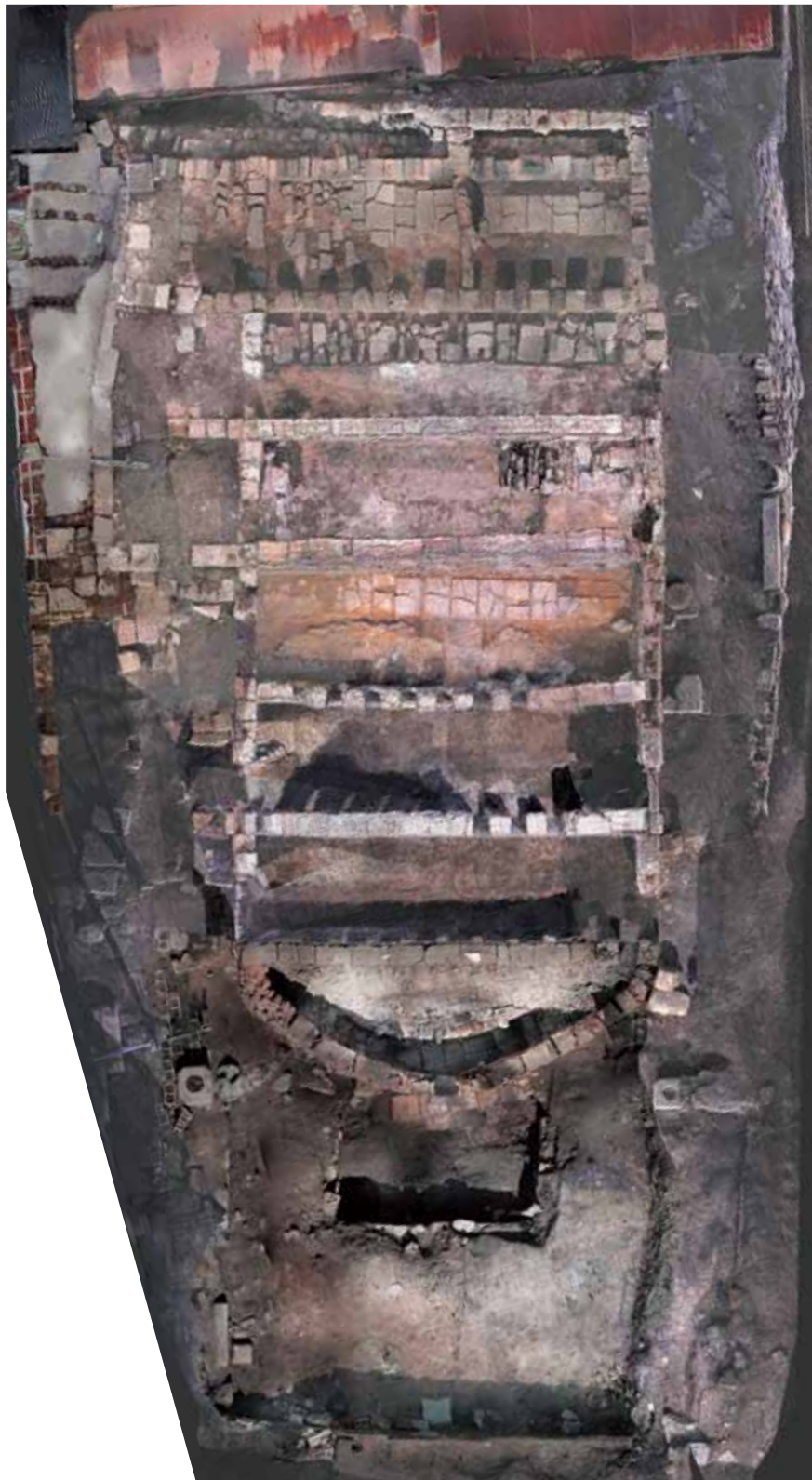


図9 新段階 オルソ画像（1：80）



凡例
— 古段階
— 中段階
— 新段階

0 3m

図10 中・古段階 オルソ画像 (1 : 80)

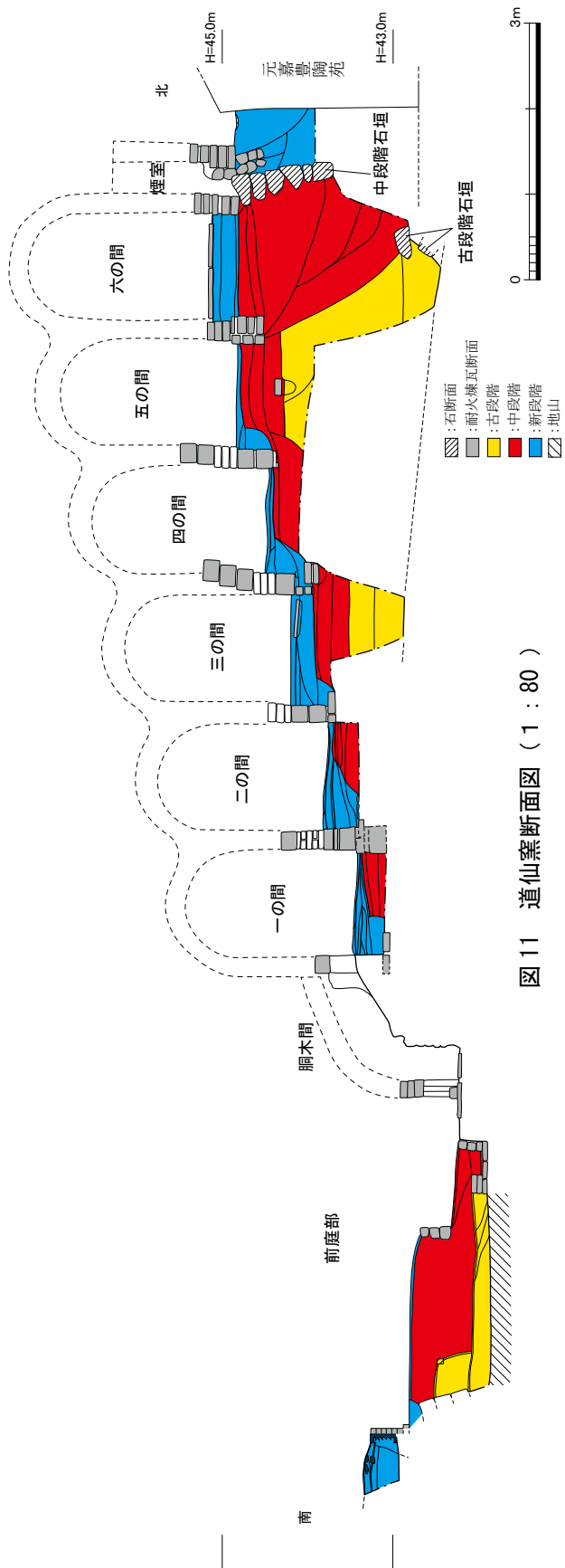


図 11 道仙窯断面図 (1 : 80)



図 13 古・中段階石垣 (北東から)

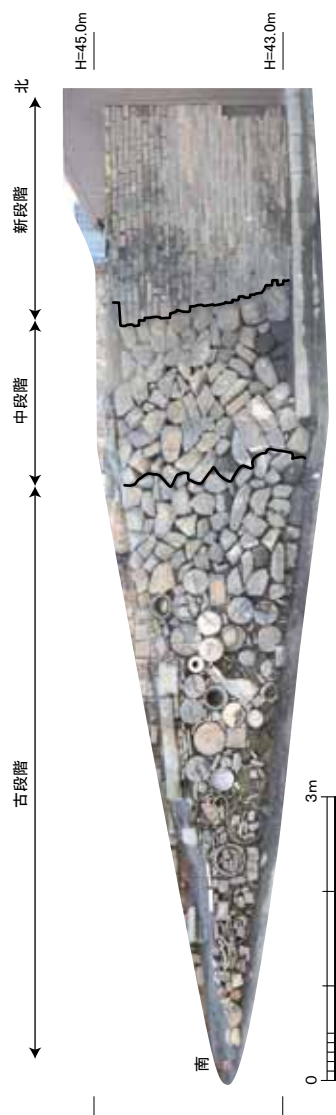
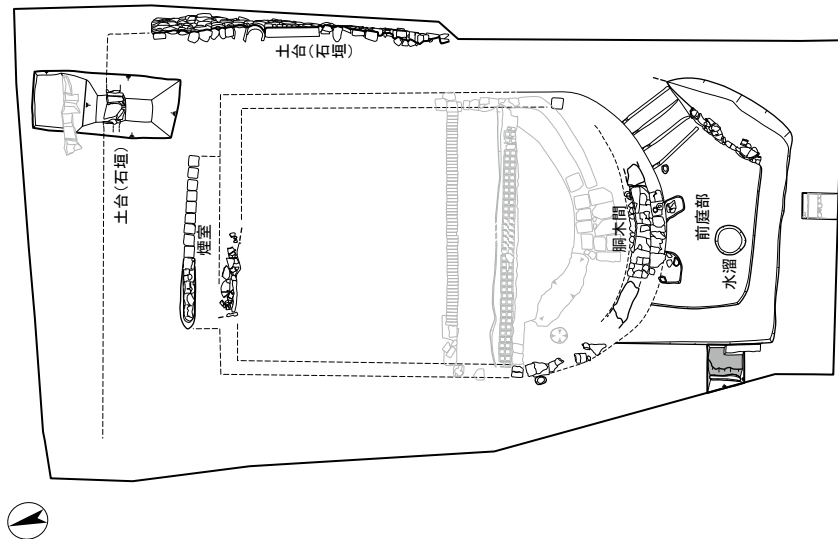
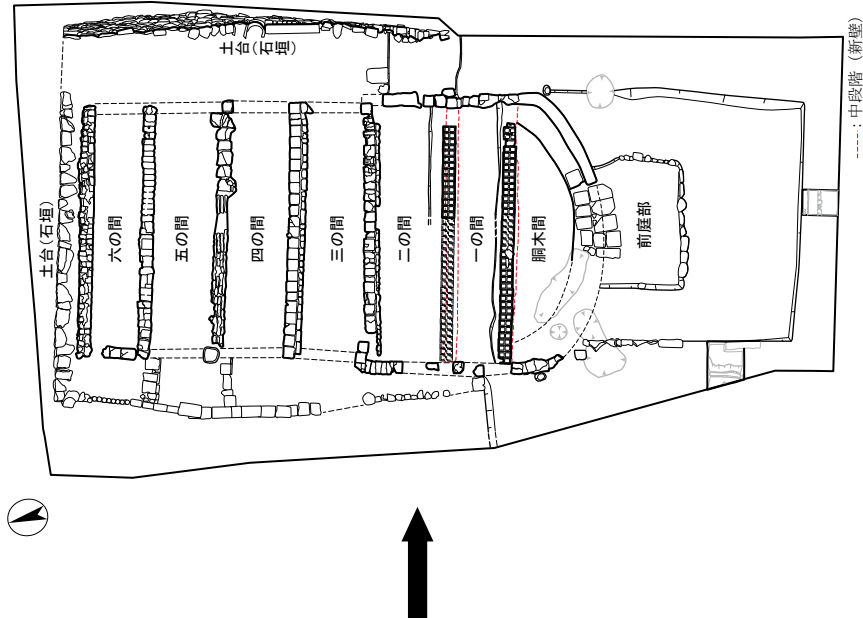


図 12 土台東側立面図 (1 : 80)

【古段階】



【中段階】



【新段階】

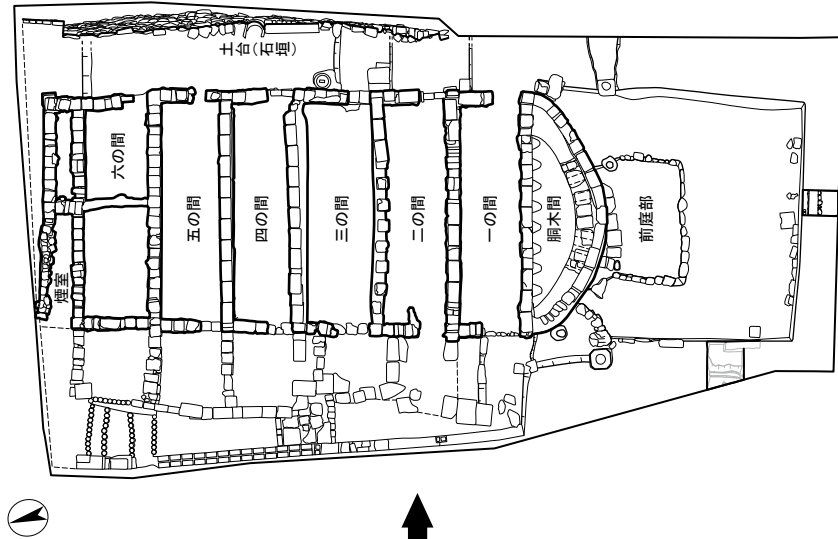


図 14 道仙窯変遷図 (1 : 150)

3. 出土遺物

調査中、大量の陶磁器類・窯道具・耐火煉瓦などが出土しました（図 15～22）。

道仙窯は大量に廃棄された陶磁器・窯道具・耐火煉瓦（ガラ）を用いて土台を造り、その上に窯を築いています。また、窯を造り直す際に床面などを嵩上げする際にもガラを使用します。

そのため土台や床面から多量に遺物が出土しています。これらの遺物の中には、道仙窯で生産していたもの、共同窯や貸窯を行なった際に使用していたもの、道仙窯または五条坂周辺で生産・廃棄され、土台や窯の造り替えの際に使用されたものがあります。



図 15 窯道具

図 15 焼成時に焼成室で使用される道具を窯道具といいます。

ツク・棚板：これらを用いて焼成室内に棚を作ります。

ハマ・トチン：作品の下に置き、作品が熔着して取れなくなることを防ぎます。

サヤ鉢（匣鉢）：中に作品を入れ、これを積み上げて焼成します。作品をサヤ鉢に入れることによって密閉され熱が均等にいきわたります。また、密閉されているため窯内にとんでいる灰が作品に付着せず綺麗に焼成できます。



図 16 耐火煉瓦

図 16 登り窯は焼成時、温度が約 1300℃以上にもなります。窯体には高温に耐えられるように耐火煉瓦を使用しています。

オオゲタ・マクラ：窯体の基底部や隔壁などに使用されます。

クレ：胴木間や部屋の天井部など曲面に使用されます。

穴あき煉瓦・アーチ煉瓦・並形煉瓦：道仙窯では、新段階時に煙室や隔壁に使用していました。

★五条坂周辺で生産・廃棄され、土台や窯の造り替えの際に混入したもの

五条坂周辺で製作していた窯元や製造業者の印が入った作品が数多く出土しました。

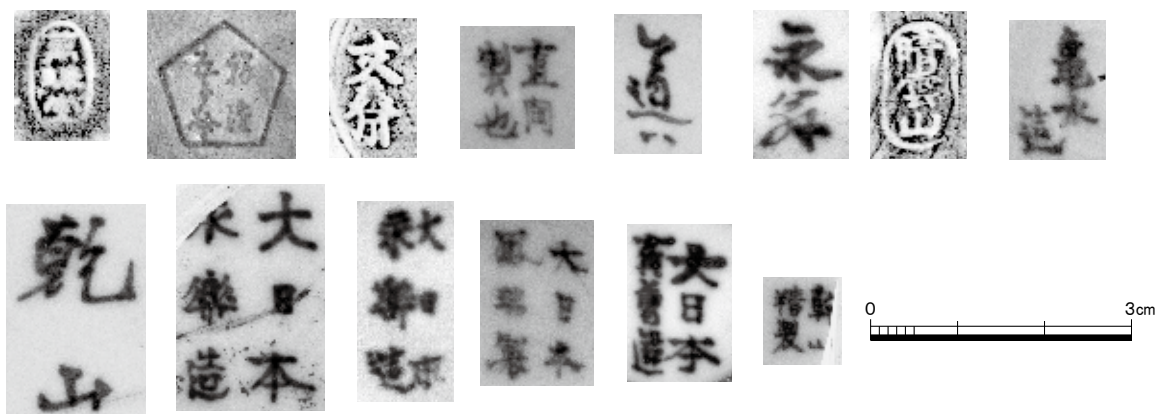


図 17 出土した遺物に押され、書かれている印・銘（1：2）

★道仙窯で生産していたもの

道仙窯は他の窯と異なり、椀・皿・湯呑などの生活で使用するもの以外に、理化学陶磁器という工業や薬品の分野において使用される瓶や貯蔵容器、蒸発皿なども生産していました。京焼の技術を用いて製作される道仙窯の商品は、質の高さ・技法ともに当時世界トップクラスだったと言われています。

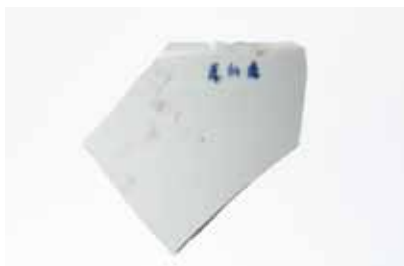


図 18 「道仙造」と書かれた瓶の破片



図 19 ポットカバー



図 20 集酸瓶

★貸窯・共同窯をした際に使用していたもの

京都では、複数の製造業者や窯元が共同して窯を使用する共同窯（寄合窯）、窯の持ち主が1間、1立ずつ小製造元や窯元へ貸し出す貸窯という制度がありました。他の製作者の作品と間違えないようにするため、サヤ鉢やハマなどの窯道具に自分の印を入れてあります。



図 21 「○に香齋」印入りのサヤ鉢



図 22 「清六」印入りのハマ

Ⅱ. 浅見五郎助窯の発掘調査成果

1. 浅見五郎助窯の概要

道仙窯と同じく 1893 年（明治 26 年）以降に築窯・開窯されたと考えられている京式の連房式登り窯です。祥瑞窯とも呼ばれ、2018 年（平成 30 年）まで道仙窯の東側に隣接して現存していました。道仙窯と浅見五郎助窯は、焚口と煙室の向きをお互い反対方向にしている点などから考えて、同時期・計画的に築窯された可能性が高いと考えられています。また閉窯した時期がわかる資料は確認されていませんが、おそらく五条坂で煙煤公害問題が深刻化する昭和 40 年代だと考えられます（図 23）。

2. 発掘調査成果

平成 30 年（2018）、宿泊施設建設に伴い当研究所により発掘調査が行われました。調査前の解体作業によって窯の上部及び三の間以降の後室は壊され、前庭部から二の間の基底部がごく一部のみ残存している状態でした（図 24）。

調査の結果、一の間の下に一時期古い胴木間を確認しました。このことから浅見五郎助窯の胴木間は、最低 1 回造り替えが行われていることが発掘調査によって明らかとなりました。浅見五郎助窯の規模や修繕に関する資料はほぼ残っておらず、平成 19 年（2007 年）に行われた測量調査成果（閉窯時の規模）しかありません。発掘調査で一段階古い胴木間の一部を確認したもののその胴木間の修繕時期などについては分からない状態でした。

しかしその後、浅見五郎助窯に隣接していた道仙窯が取り壊されることとなり、道仙窯も発掘調査の対象となりました。

浅見五郎助窯と道仙窯の所有者は、開窯時に親戚関係であったと伝わっており、2つの窯は狭い土地を工夫しながら同時期・計画的に築窯されたと考えられていることから、浅見五郎助窯の規模も道仙窯と似ていると想定できます。

閉窯時（新段階）と開窯時（古段階）の2つの窯を並べると前庭部と煙室がほぼ並行して並んでいます。このことから浅見五郎助窯の調査で確認した一段階古い胴木間の時期は、道仙窯の古段階と対応し、1893 年（明治 26 年）以降から 1943 年（昭和 18 年）以前のものだと考えられます。

また浅見五郎助窯の閉窯時の煙室が道仙窯の前庭部と並ぶなら、浅見五郎助窯の全長は約 11.5 m あったことが想定できます。

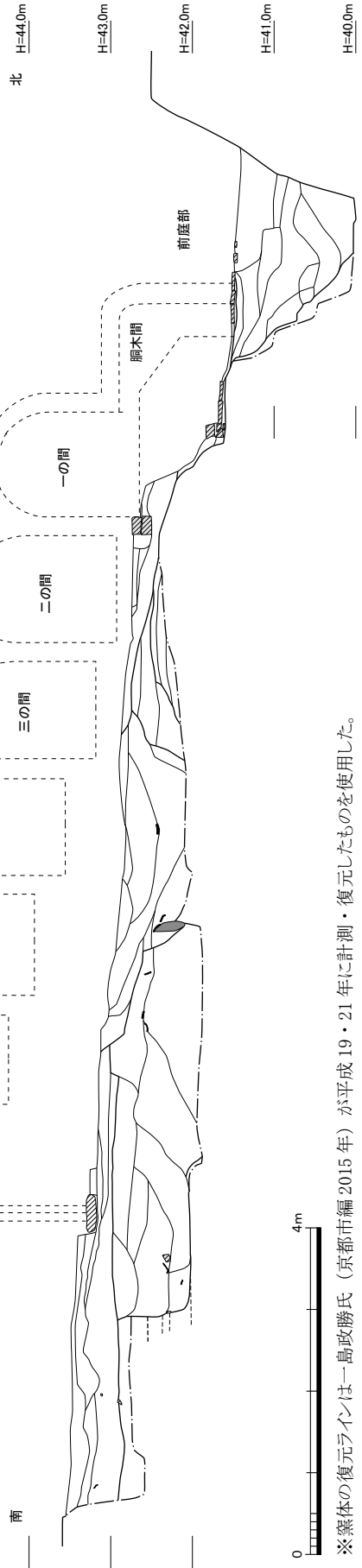
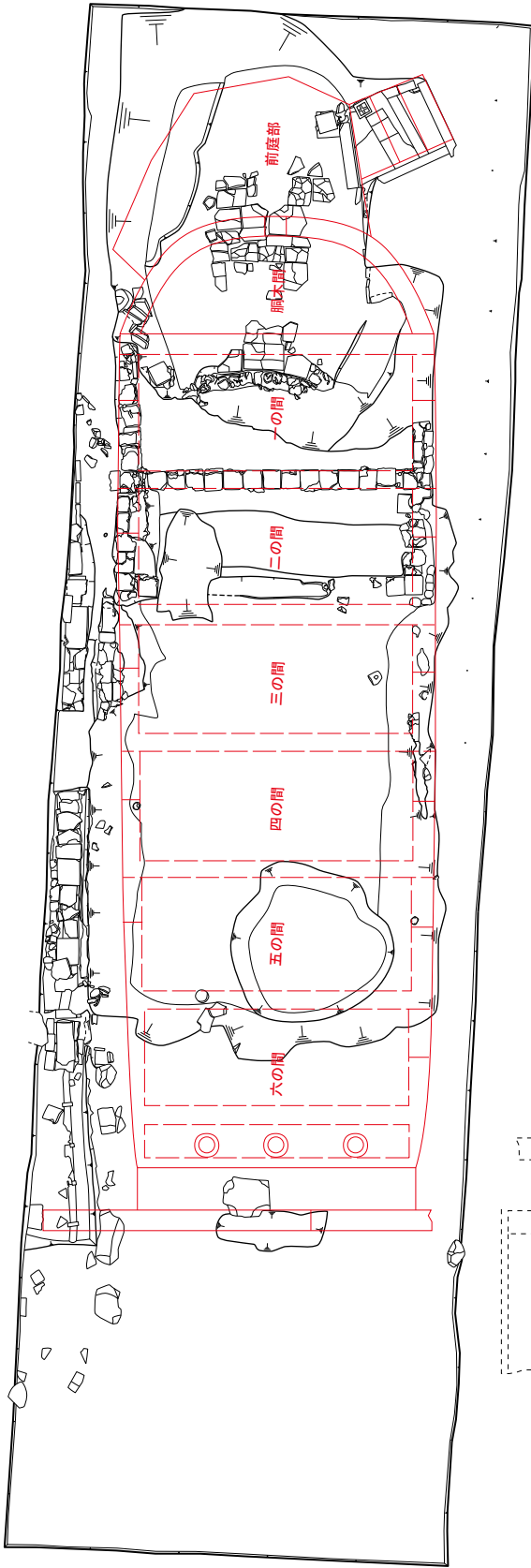
文献資料などもなく、一つの調査だけでは分からなかったことも周辺の調査成果によって明らかにできます。発掘調査だからこそ分かった成果の一つです。



図 23 解体前の浅見五郎助窯（北東から）



図 24 調査区全景（北から）



※竪体の復元ラインは一島政勝氏（京都市編 2015 年）が平成 19・21 年に計測・復元したものをを使用した。

図 25 浅見五郎助窯の平面図・断面図（1 : 80）

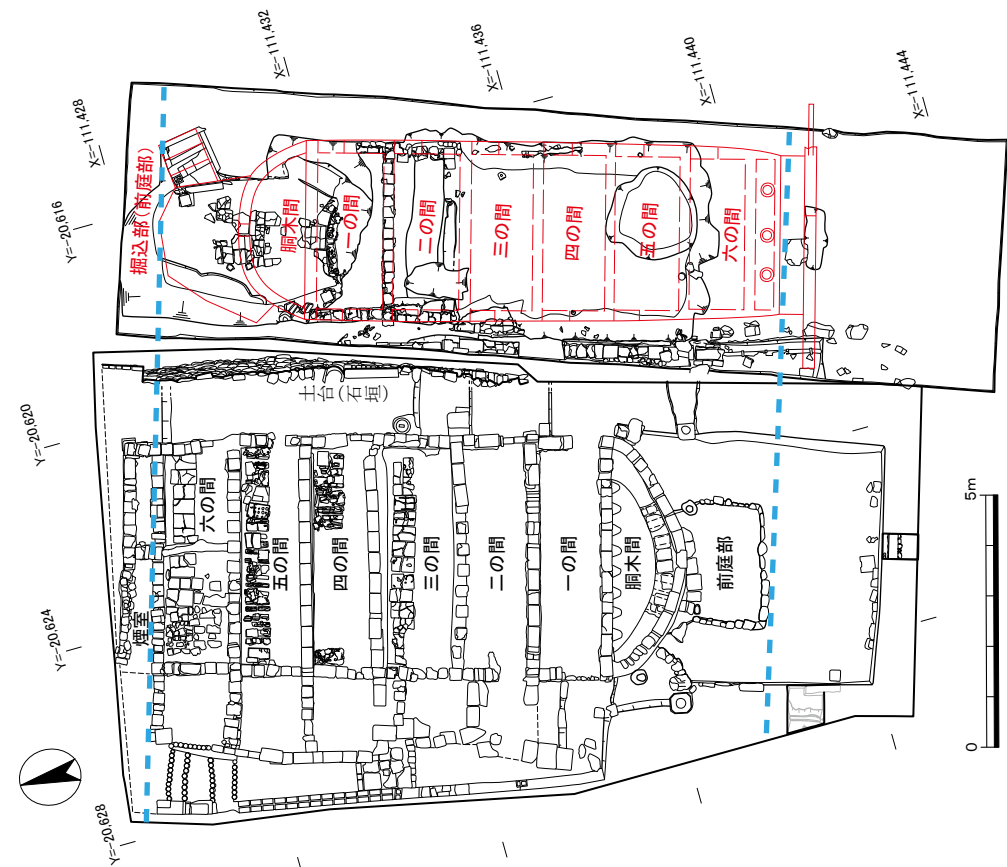
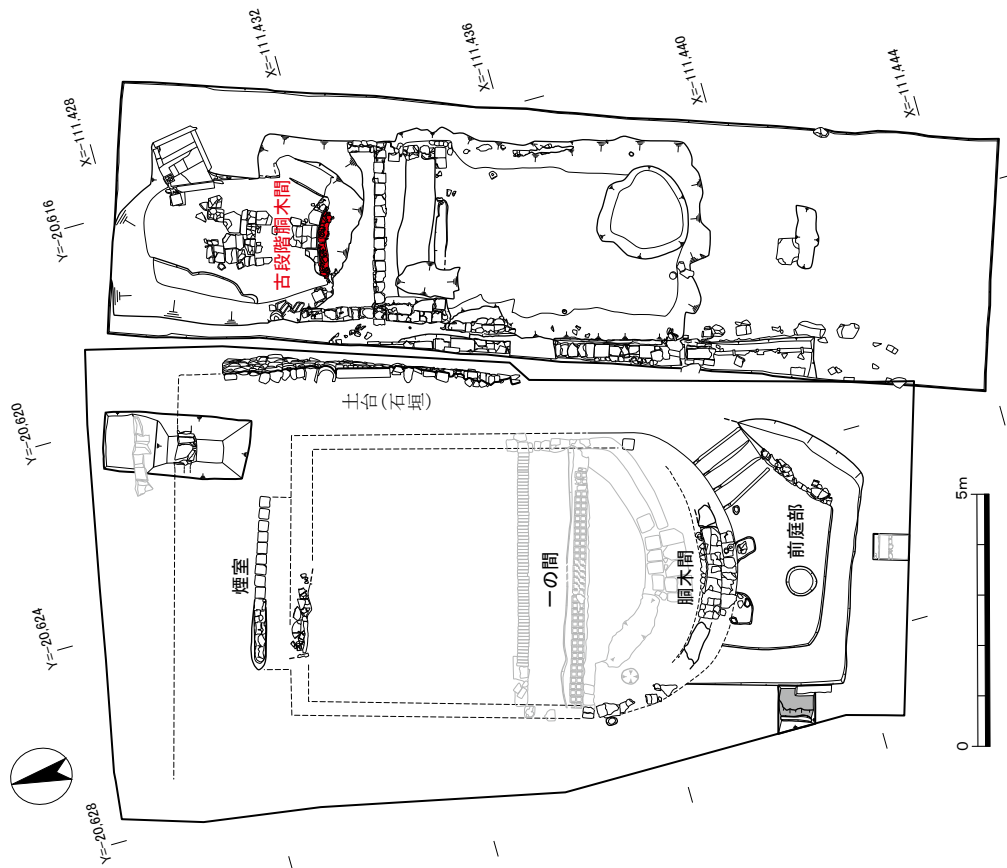


図 27 開窯時の道仙窯 (左) と浅見五郎助窯 (右) (1:150)

図 6 閉窯時の道仙窯 (左) と浅見五郎助窯 (右) (1:150)

Ⅲ. 井野祝峰窯の発掘調査成果

1. 井野祝峰窯の概要

江戸時代末頃に二代目清水六兵衛の長男である初代清水七兵衛によって当地に開窯された京式の連房式登り窯です。この窯は、初代清水七兵衛から明治15年(1882)頃に山村長村、その後、時期は不明ですが山本辰之介、明治40年(1907)頃に陶工として初の帝室技芸員となった三代目清風与平、昭和24年(1949)に二代目井野祝峰へと所有者を変えながら受け継がれていった窯です(図28)。

この窯も複数回造り替えが行なわれていたようで、大正時代に清風与平が所有していた時は、全長10.24m×幅約3.9～4.7m、焼成室を7室もち、各部屋には12～13個の狭間穴があったことが残された資料からわかっています。また昭和40年代頃、井野祝峰窯で作られる盆栽鉢や打ち込み成形と呼ばれる技法でつくられた磁器製品が人気を博し、昭和46年(1971)に作業場と登り窯を一体的なものとして効率化を図るために窯を縮小して築き直しましたが、その直後に京都府公害防止条例が施行されたため、窯に火を入れることなく使用できなくなりました。その後、ガス窯や電気窯を設置するために四の間以降の焼成室が解体され、胴木間から三の間までしか残されておらず、縮小後の部屋数も不明でした。

平成27年(2015)8月に立命館大学の学生や有志によって清掃・民具(窯道具)整理・発掘調査・お披露目会が行なわれました。発掘調査の結果、基底部のオオゲタの痕跡から昭和46年(1971)に縮小された窯は、焼成室が五の間まであり、窯の幅は縮小されたことがわかりました。

また、胴木間の東前方に一段階古い床面を確認し、清風与平が所有していた大正期の窯は、閉窯時と比べて大きかったことを確認しました。

2. 井野祝峰窯の発掘調査成果

平成27年(2015)の調査後、井野祝峰窯は一時現状保存されていましたが、宿泊施設の建設に伴い解体されることとなり、平成29年(2017)に当研究所によって再度発掘調査が行われました。

調査の結果、江戸時代末に清水七兵衛が所持していた時の窯体は確認できませんでしたが、立命館大学の調査によって確認されていた昭和46年(1971)までの窯の様相の確認に加えて、清風与平が所有していた大正期の窯の様相も確認することができました。



図 28 井野祝峰窯 新段階全景（西から）

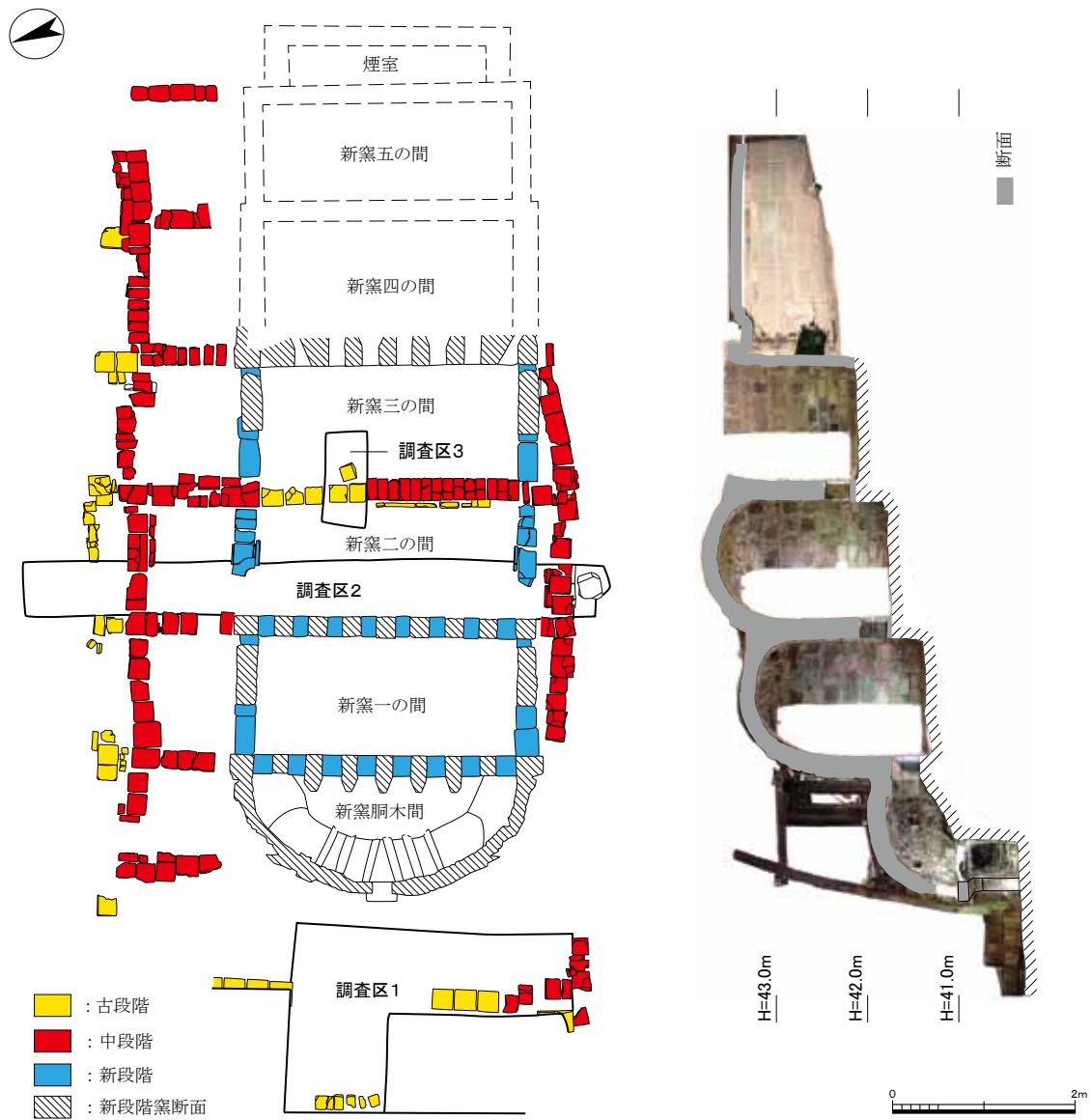
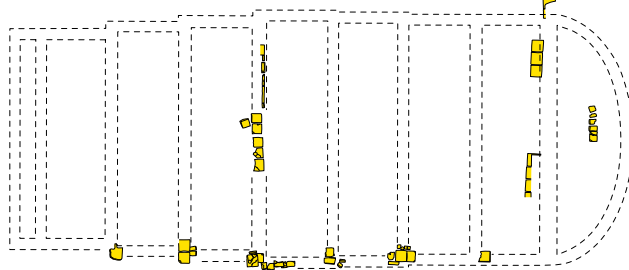


図 29 井野祝峰窯の平面図 立面・断面図（1 : 80）

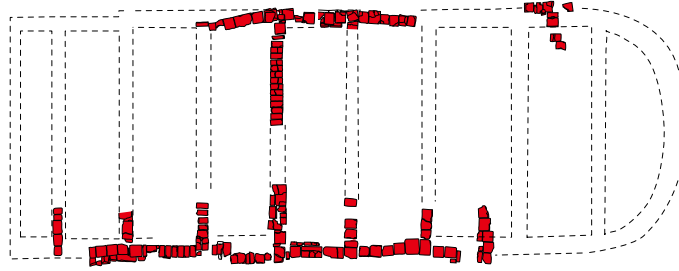
【古段階】

大正期 所有者：清風与平



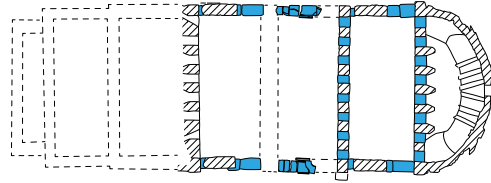
【中段階】

1971年以前 所有者：2・3代目井野祝峰



【新段階】

1971年～2018年 所有者：3・4代目井野祝峰



- : 古段階
- : 中段階
- : 新段階
- ▨ : 新段階窯断面



※窯体の復元ラインは一島政勝氏が計測・復元したものや聞き取り調査、松林霽之助の記録（前崎編 2014 年）などを基に作成した。

図 30 井野祝峰窯変遷面図（1 : 150）

IV. 五条坂における京式登り窯の特徴

発掘調査成果や現存している窯の状態から五条坂における京式登り窯の特徴を以下にまとめました。

1. 燃烧室は半円形・焚口は1つ

燃烧室は胴木間と呼ばれ、胴木間と焼成室を合わせた平面形は「馬蹄形」を呈します。明治時代中頃になると燃料は木材だけでなく石炭も使用されていました。

2. 焼成室全体の平面形は長方形

同じく京焼であっても粟田の登り窯は、瀬戸焼の影響を受けており、焼成室1つ1つの平面形は長方形ですが、後室へいくほど幅が長くなり、全体の平面形が扇形のものもあります。

3. 狭間穴は「横狭間」構造

大きさや数はそれぞれの窯によって異なります。窯を築く場所や土などによって室内の温度が異なるため、築窯師がそれぞれの窯の大きさに合わせてつくります。

4. 構築材はオオゲタ・マクラを使用 (京都だけ!)

これらの構築材は信楽など他地域からの購入品と考えられていました。しかし1873年(明治6年)に製作された『陶器説』によると、窯元がそれぞれ作り、築窯に使用していたと記述があります。発掘調査によって江戸時代末期から明治時代初頭の窯の基底部に窯元の印が押された耐火煉瓦を確認することができ、窯元が窯を造る前にそれぞれ煉瓦を作っていたことが明らかとなりました。

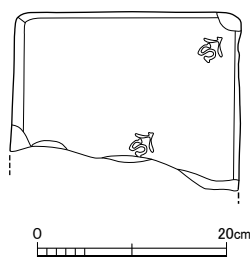


図 33



図 34

図 33 道仙窯出土のマクラには所有者入江道仙の印と考えられる「入江」の押印。

図 34 井野窯出土のマクラには初代所有者である清水七兵衛の押印。

5. 窯の土台が築造されることがある (京都だけ!)

限られた敷地に窯を築くことが多いため、人工的な傾斜面(窯の土台)を造ることがあります。土台の造成には土と共に陶磁器片や窯道具など窯業廃棄物も用いて湿気を抜けやすくしています。

6. 前庭部・胴木間が一段掘り下がる

前庭部及び胴木間の床面は地表面より一段掘り下げて構築されている例が多い。窯の傾斜を大きくするための工夫と考えられます。

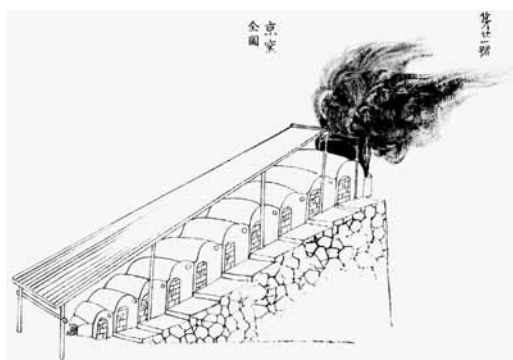


図 35 京式連房式登り窯図

おわりに

登り窯の民俗学的研究・調査は数多く行なわれています。これらの成果にプラスして、民俗学的な調査だけでは確認することができない窯の変遷、窯の下部構造、遺物など土に埋もれたものを発掘調査で明らかにすることによって窯への理解がより一層深めることができます。

2018年に五条坂の登り窯が地域にとって重要な遺跡として認められ、発掘調査を行ない、窯体の構造や変遷の過程を全面的に調査できたことは、京焼の歴史の解明にとって極めて重要な成果と言えるのではないのでしょうか。京都市埋蔵文化財研究所が行なった調査が今後、近現代の京焼研究そして五条坂の活性化の一助となるよう努めます。

主要参考文献

- 岡 佳子『日本のやきもの 窯別ガイド 京都』淡交社 2003年
- 岡田麻衣子『音羽・五条坂窯跡（道仙窯）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2019-13 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2020年
- 木立雅朗・米田浩之「道仙化学製陶所窯跡 第5次発掘調査成果報告」『立命館文学』627号 2012年
- 木下保明『六波羅政庁跡・京焼窯跡（井野祝峰窯）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2017-12 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 木下保明『音羽・五条坂窯跡（浅見五郎助窯）』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2018- 1 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2018年
- 京都市編『藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究報告書』2015年
- 田村喜子『五条坂 陶芸のまち今昔』新潮社 1988年
- 中ノ堂一信『京焼 伝統と革新』淡交社 2018年
- 藤岡幸二編『京焼百年の歩み』附録『陶磁器説』『陶磁器説図』財団法人京都陶磁器協会 1962年
- 前崎信也編『大正時代の工芸教育—京都市陶磁器試験場附属伝習所の記録—』宮帯出版社 2014年
- 立命館大学 21世紀COE 京都アート・エンタテインメント創成研究近世京都手工業生産プロジェクト『京焼と登り窯—伝統工芸を支えてきたもの—』2006年

★岡田 2020・木下 2018 は、京都市埋蔵文化財研究所の公式ホームページで閲覧できます。 HP → 「各種資料情報」 → 「4. 発掘調査報告（シリーズ）」 → 例：2019-13

講演 3

五条坂の今昔と考古学－京焼登り窯発掘調査の歩み－

木立雅朗（立命館大学文学部）

はじめに－鳴滝から五条坂へ

日本の焼物の考古学的研究のなかで、京焼研究は全国最低と言ってよいほど遅れています。施設も貧弱です。佐賀県有田町や愛知県瀬戸市には陶磁器専門の美術館や資料館・博物館が複数あります。それらよりも大きい京都市に、京焼専門の博物館も美術館もありません。

私は、2000年から2005年にかけて、尾形深省（乾山）を顕彰する法蔵禅寺ご住職や研究者の方々とともに、鳴滝乾山窯跡の発掘調査を行いました。多くの成果を上げた反面、登り窯の遺構を検出することができませんでした。京焼は近世日本を代表する焼物ですが、研究拠点も展示拠点もないため、全国各地から出土する京焼を研究する人びとから、「京焼はブラックボックス」と言われていました。都市化がその原因だと言われていたため、五条坂に登り窯が残っているなどとは、考えてもいませんでした。しかし、発掘中から、京焼の民俗調査を行いたいと考え、当てもなく、京焼唯一の伝統産地・五条坂を徘徊しました。

そのとき、偶然、五条坂・藤平陶芸のギャラリーで登り窯の写真展に遭遇し、その登り窯が五条坂に残っていると知りました。そのときの驚きは、今も忘れられません。2000年当時、五条坂に7つの登り窯が残っていたことを知るのは、それからしばらく後のことでした。

もっとも驚かされたのは、その貴重な登り窯を残してきたのは、所有者の善意と忍耐だということです。彼らが爪に火を灯さなければ、登り窯は残されなかったと思います。地域や日本の宝を守る役割を、所有者個人が担っていたのです。全国のどこにも見られない、「京都」独特の現象には、今も強い違和感を覚えています。しかし、登り窯を守っている人びとや、その周囲の人びとと触れ合うことによって、私の心は救われ、励まされました。彼らの回りには歴史が息づいていたからです。

1. 道仙化学製陶所窯跡の発掘調査

藤平陶芸の登り窯で出会った、京都建築専門学校の佐野春仁氏は、登り窯を堪能した一人です。彼は、楽只苑の当時の社長と話し合い、敷地内の登り窯跡の上に東屋を建築する計画を立てました。おそらく、その東屋設計の基礎資料にしたかったのでしょうか、私に「発掘するなら今ですよ」とお誘いを頂きました。新しい窯ですが、「初めて京式登り窯が発掘できる」という思いで調査を開始しました。2005年から2010年まで調査を行い、楽只苑と佐野春仁氏らの協力を得ました。そのうち、隣接地の浅見五郎助氏からもご理解を得て、浅見窯の調査をさせて頂きました。

道仙化学製陶所窯跡の発掘調査では、楽只苑の当時の社長・湯浅士郎氏の全面的な協力を頂きました。また、京都建築専門学校の佐野氏と学生さんには、地上に残されているゴミ類



写真 1. 発掘調査前の道仙窯跡 (2004 年 10 月)



写真 2. 発掘後の道仙窯跡 (2009 年 9 月)

を掃除して頂きました。

この発掘調査によって 6 室の京式登り窯であることを確認しました。道仙化学製陶所は理化学磁器を中心に生産していましたが、だからと言って、特殊な構造に改造されているわけではありません。典型的な京式登り窯で理化学磁器を焼成していたのです。

2 の間・3 の間からは多量の理化学磁器が出土しました。2 の間からは大型の乳鉢や染色ビーカーなど、3 の間からはブフナー・ロートが、4・5 の間から多量のゴウ (匣鉢) が出土しました。そのゴウには、複数の窯元の名前が書かれていました。

聞き取り調査から、2 の間・3 の間で理化学磁器を焼成し、4 の間・5 の間は京焼陶工に貸されていたことがわかりました。その内容は、発掘調査の成果と合致しています。

なお、窯焚きの使用を停止した昭和 43 年以降、登り窯は物置としても使用されていたといえます。窯内から出土した遺物は、必ずしもその部屋で焼かれたとは限りません。

その後、京都市埋蔵文化財研究所の岡田麻衣子氏が報告した通り、道仙化学製陶所窯跡は 2019 年から 2020 年にかけて、本格的に発掘され、極めて詳細な事実が判明しました。私たちが行った 2010 年までの調査が地上部分を中心にした民俗調査的なものであったのに対して、今回の報告ではその地下の様子を詳細に知ることができました。

2. 道仙化学製陶所所蔵文書

入江道仙の子孫である、入江太津治・麗子ご夫妻のご協力、道仙化学製陶所が保管していた戦前・戦後の文書類を検討させて頂きました。会社の決算報告や領収書の束は、聞き取り調査や発掘調査だけでは知ることができない、極めて詳細な記録です。単なる古い帳簿や書類ですから、これまであまり重視されることがなかったと思いますが、実は、京焼研究にとって極めて重要な資料です。

これらの文書類によって、入江道仙が明治 26 年に「五條通橋東 4 丁目 449 番地」の土地建物を購入したことが明らかになりました。そのときの図面には登り窯や長屋が描かれていません。しかし、『京焼百年の歩み』の付図による限り、明治末年までには登り窯が築造さ

れたと考えられます。残された出勤簿などから、かつての従業員は昭和7～12年頃には10～14名、昭和18年には最大12名で、最盛期でも15名を越えない程度の規模だったことが分かりました。昭和30年代の終わりには4・5名となり、それが年々減少して最後の昭和43年には轆轤師一人になってしまったことも分かりました。



写真3. 道仙化学製陶所文書の一部
(昭和18年11月 轆轤増設局 分割工場届け)

入江道仙は、昭和18年、企業合同して入江道仙から「有限会社 道仙化学製陶所」に発展したこともわかりました。また、帳簿類から、窯焚きや貸し窯の実態を詳細に知ることができました。貸し借りの詳細な実態がはじめて具体的にわかったと思います。1の間は炎が粗いため、粗磁器や理化学磁器が焼かれていたと思います。道仙化学製陶所は理化学磁器が専門ですから、最もよく焼ける2の間と3の間を使用し、1の間と4の間、5の間を貸し出していました。1の間は一人の人に貸し出し、その人がさらに何人かの人にまた貸ししていました。砥石や人形が窯詰されたことが確認されましたが、道仙自らもその一部を借りて賃料を支払っていました。自分の窯をまた貸しで借りていたのです。

面白いことに、隣に築かれていた浅見五郎助と入江道仙はどちらも登り窯を貸し借りしあっていました。登り窯の所有者同士が、互いの登り窯の一部を貸し借りしていたのです。

貸し窯を行っているとき、所有者といえども、自分の都合で窯焚きのタイミングを変更するわけにはいきません。そのため、急な注文があった場合には「出窯」（でがま。他者の窯を借りること）せざるを得なかったようです。入江道仙と浅見五郎助は親戚関係にあり、登り窯も隣り合わせに築いていましたから、お互いに融通しやすかったようです。しかも、入江道仙は理化学磁器を、浅見五郎助は陶器を焼いていましたから、使用する主要な部屋が違います。だからこそ、お互いに融通しやすかったのだと思います。おそらく、両家は初めからそのことを考慮して登り窯を築いたのでしょう。発掘調査で二つの窯が部屋の間仕切りまで見事に横並びさせていることがはっきりしましたが、これは築造当初から引き継がれたものだと思います。

しかし、二つの窯を計画的に稼働させていても、さらに別の窯に「出窯」したことがあったようです。わずかですが戦前の帳簿から確認できました。窯焚きは、多い時には一月に一回行われていましたから、道仙窯と浅見窯の二つでは1カ月に2度程度の窯焚きが行われていた計算になります。それでも「出窯」することがあるほど忙しいことがあったようです。

道仙文書はまだすべての整理が終わっていません。まだまだ多くのことが分かると思います。古い帳簿類にすぎませんが、知られていなかった五条坂や登り窯の歴史の生き証人として、とても重要です。

3. 伊吹弘氏が描いた世界－「五条坂南側町並散華の図」

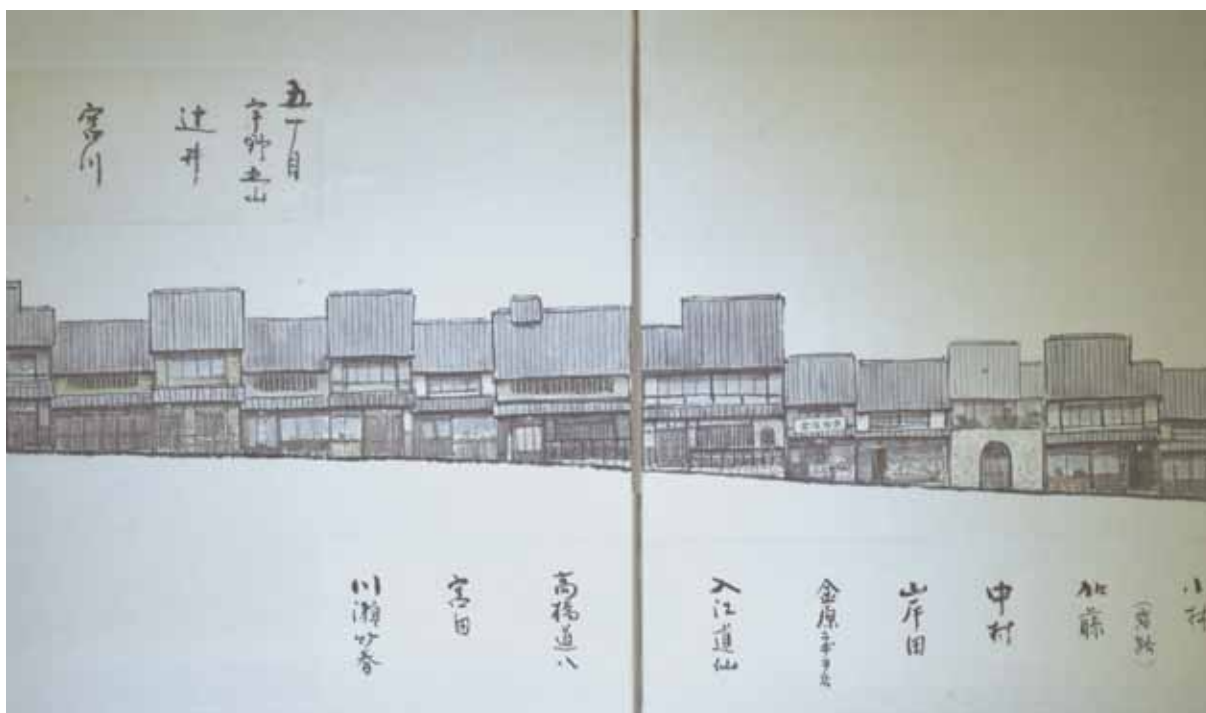


写真4.「五条坂南側心象風景」 第3－4扇（強制疎開前の入江道仙家）

五条坂に生まれ育ったインテリアデザイナーの伊吹弘氏（1926－2010年）が描いた屏風は五条坂の貴重な記憶遺産です。いくつもの絵を残されましたが、特に「昭和二〇年 強制疎開立ち退き前の五條坂南側 心象風景」（1983年8月作製）と「昭和二〇年春 五条坂南側町並散華の図」（1992年4月作製）の2枚の屏風は、心を揺さぶります。

「昭和二〇年 強制疎開立ち退き前の五條坂南側 心象風景」（以下、心象風景）は、建物疎開以前の町並みと町家の所有者の名前を記しています。「京都明細図」では、強制疎開で撤去された家々の地番と区画が判明しますが、この「心象風景」では当主の名前までがわかるのです。

「昭和二〇年春 五条坂南側町並散華の図」（以下、散華の図）は建物疎開による立ち退きが行われている状況を詳細に描いています。縄を引いて建物を引き倒す様子、解体した部材を運ぶ様子、引っ越し作業を行っている様子がとても詳細です。

この二つの屏風を並べれば、建物疎開の実態、散華の状況が生々しく伝わってきます。ここでは入江道仙の自宅を中心に紹介しましょう。

道仙化学製陶所の社長の自宅は、高橋道八家に隣接した立派な町家でした。しかし、建物疎開によって完全に撤去されました。高橋道八家は奥にかなり長い敷地を持っていましたから、戦後も狭くなった同じ地点で活躍されています。しかし、入江道仙家をはじめとするほとんどの家はわずかな日数で退去せざるを得ませんでした。

理化学磁器は軍需品に準じる製品だったため、戦時中であっても生産を追われていましたが、建物疎開で自宅と第1工場を失った道仙化学製陶所は、その整理に追われました。例年

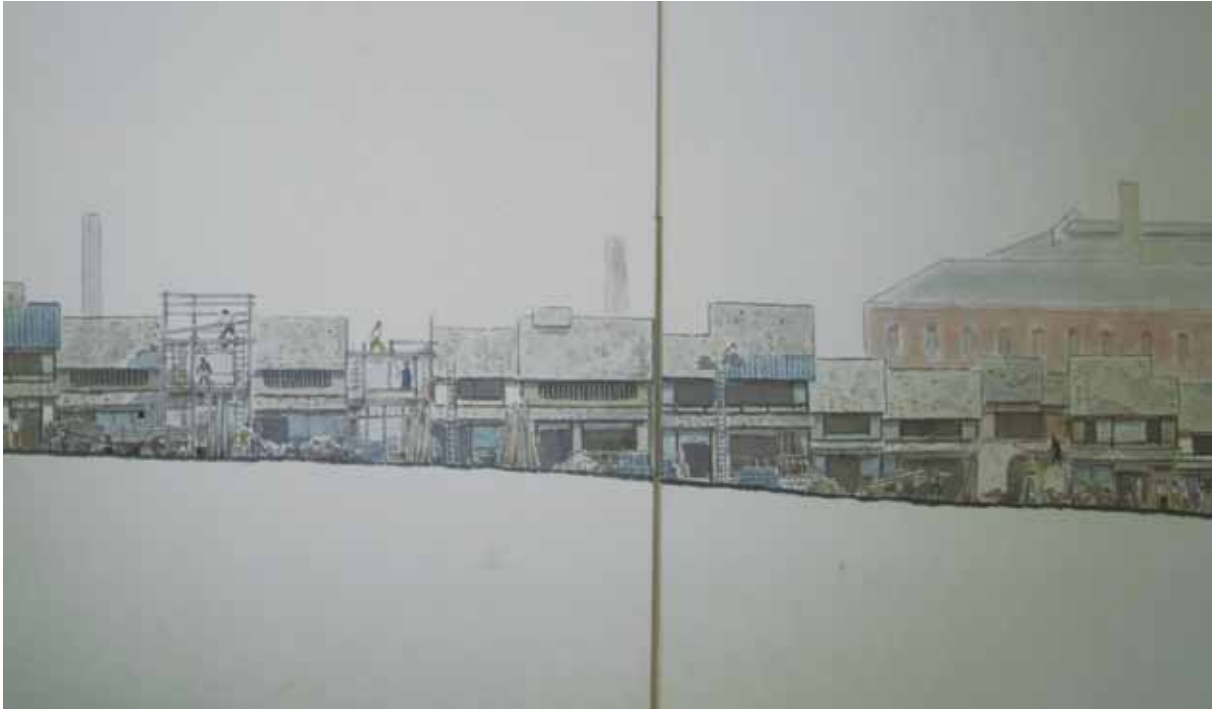


写真 5. 「五条坂南側町並散華の図」 第 3 - 4 扇（強制疎開中の入江道仙家・写真 4 と同じ位置）



写真 6. 「五条坂南側町並散華の図」 第 2 扇（建物を引き倒し、粉塵が舞い上がる）

10～12 回程度の窯焚きを行っていたにも関わらず、昭和 20 年度は 3 回しか窯焚きを行うことができなかつたようです。昭和 20 年度の「決算報告書」（道仙文書）を読むと当時の悲惨さが伝わってきます。

この強制疎開によって、五条坂は町並みの半分を失いました。戦後、しばらくは空き地のままでしたが、国道 1 号線が通ることになって、南北分断が固定化されてしまいました。登り窯は五条通りに面しておらず、音羽川に接した町家奥に佇んでいたため、運良く建物疎開から逃れることができました。しかし、もし、五条通りの北側が対象になっていたら、道仙化学製陶所窯、浅見五郎助窯、小川文斎窯、三浦竹泉窯などが疎開の対象になったはずで

です。伊吹弘氏はこの 2 枚の屏風以外にも多くの絵画を残しました。私は猪飼祐一氏からこの屏

風の存在を教えられ、見ておくべきだと強く薦められました。奥様の伊吹紫子氏のご協力でいくつかの屏風・掛け軸を拝見させて頂きましたが、その内容に息をのまざるをえませんでした。これほどの記録・記憶を残されていること、何年も五条坂を歩いていながら知らなかったことに本当に驚かされました。これこそ「地域の宝」を形にしたものであり、本来の価値が十分に認められていなかったという意味で、道仙化学製陶所文書を最初に拝見させて頂いた時と似ていると感じました。

4. 澤野久雄『晩年の石』（『新潮』57（9）、9月号、141－161頁）の五条坂

小説家・澤野久雄（1912-1992年）は、京都を題材にした小説をいくつも残しています。澤野の短篇集『堀川東入ル』（1978年、エポナ出版）には京都の職人を題材にした8篇の小説が収録されています。そのうち3編が五条坂を対象とした清水焼関係の小説で、「五条坂」と「回転木馬」の2篇は轆轤師を取り上げています。轆轤師は題材として取り上げられることが多い職人で、窯焚き職人を主人公にした「晩年の石」は珍しい小説です。彼の小説の中でも異色で、主人公の職種の知名度がなかったため、その仕事を丁寧に説明してくれています。主人公の活動を通じて、五条坂の登り窯の詳細な記述がなされている点は、私にとって大変有り難いことです。おそらく、窯焚き職人に対して実に詳細な取材を行ったのでしょう。「晩年の石」の初出は1960年の雑誌『新潮』（『新潮』57(9)、9月号）で、取材はそれ以前に行われたと思われます。彼は1957年に「五條坂」（『新潮』54(11)11月号）を発表しているため、その前から五条坂の取材を継続していたことがわかります。

以下に澤野久雄の目から見た「五条坂」や登り窯の様子を解説した部分を引用してみましよう。

窯焚きを仕事にする人は、近年ひどく少なくなつた。五條坂にある十一ののぼり窯に、戦前は四十人もいた窯焚きが、いまは六人きりいない。労力の割に、報酬が少い。みんな散つていつてしまった。一つの窯に四人の窯焚きが要るから、休んでいる者はいつも二人だけだ。急に迎えを走らせても、その男たちが家にいるとは限らない。だから窯に火が入つた以上、五平は約束の仕事を休むことができない。（澤野 1978、107-108 頁）

五條坂にある十一ののぼり窯は、この頃ではほぼ月に一度ずつ、火を入れる習慣になつていた。窯焚きが足りないから、二つの窯を一度に焚くことは出来ない。（澤野 1978、144 頁）

小説ですから多少の変更があるでしょうが、この記述が正確な取材に基づくものであれば、1960年前後の登り窯は二つ同時に窯焚きをすることができないほど、専門の窯焚き職人の数が減少していたこととなります。ちょうど、電気窯などが普及しはじめて登り窯を借りる人が減少しはじめていた時期と重なります。

薪がうまく投げられるまでには、三年かかるといわれている。自分の判断で、陶器がほぼ満足に焼けるようになるまでには、十年かかるという。まして、炎の色を見て、窯の中の陶器の肌が、時々刻々に正しく目に描けるようになるまでには二十年の月日が必要だとされた。

五平が四十にならぬ前に、立派に一人前で通るようになったのは、いつからか炎に魅入れられていたからかもしれない。(澤野 1978、132 頁)

なるほど美しい陶器は、彼の焚く窯から数多く送り出された。世評にのぼる、新しい陶工も、幾人かは送り出した気がしている。たしかに彼らは、窯焚きの手を経なければ、自分の作品を一目に晒すことは出来ないのだ。けれども、名誉はことごとく彼らの手に落ちた。金も、— そうだ、六十になる五平の収入は、三十歳余りのサラリーマンのそれとちがいはしない。貧しいために、妻は家庭と店とを背負うことになった。そういう一つの犠牲の上に、彼は自分のわがままを通して来たのだろうか。(澤野 1978、147 頁)

京都の伝統工芸は発達した分業によって高度な技術を保っていました。登り窯の窯焚きは1の間から3の間までが難しく、まさしく、その部分で染め付け磁器や理化学磁器が焼成されます。

一般的には轆轤師や絵師の技術が注目されていますが、澤野氏は窯焚き職人の技術とその重要性に注目しています。給料も安く、後継者の育成もままならない。窯焚き職人がいなければ、「陶工は壺一つ焼けない」。陶工は窯焚きにすべてをゆだねていたにも関わらず、口出しして失敗したことが紹介されています。このようなかたちで窯焚き職人を評価した事例は、私が知る限りありません。五条通をただ歩くだけではこのような小説は書けません。夜通しの窯焚きに参加しなければ書けないと思われるような内容も含まれています。「地域の力」を認識し、深く調査したのでしょう。その中で、窯焚きの技術の高さに関わらず、評価が低いことを批判的にとらえたのだと思います。多様な分業によって成立していた清水焼の実態に迫っており、大変参考になります。このような方たちが清水焼を支えてきたにも関わらず、1960年前後に電気窯の普及でその仕事が失われつつあったことをリアルに記録しています。

5. 五条坂と登り窯の未来—私たちが伝えるモノ・コトは何か?—

岡田報告でわかるように、非常に詳細な発掘調査が行われ、ようやく、京焼窯の本格的考古学調査研究が始まったと思います。今後も、いくつかの調査が行われることを期待しています。

発掘調査の成果をまとめるためには、帳簿類や屏風などの地元に残された多様な史資料、小説に書かれたかつての様子などが、とても良い参考になりました。しかし、そこに導いてくださったのは、すべて地元で暮らしてきた方々の言葉です。聞き取り調査によって多くの事実を知り、史資料を教えてくださいました。地元の方々にとって「当たり前のこと」ですが、皆さん、熱い想いで私を誘導



写真7. 「五條坂」石碑 (大和大路五条。北東角)

してくださいました。その言葉によって、史資料類や登り窯に命が吹き込まれているように感じることもありました。地域の歴史に誇りを持ち、それによって彼らは生かされているとも感じますが、私のような外部からの調査者からみれば、彼らこそが歴史を生き生きとしたものにしていただと感じました。遺跡や史資料は本当に大切な遺産です。けれども、最も強く感じたのは、地域の生き証人こそが、「地域の歴史の宝」だということです。彼らがいなくなってしまうと、登り窯も史資料も、その魅力が半減してしまうでしょう。

多くの受難を越えてきた登り窯

高度経済成長が終わり、バブル崩壊やリーマン・ショックの影響を受けた五条坂から、かつての賑わいは失われました。生活変化の影響も大きいと思います。そこへ世界的なインバウンドによって2013年以降、京都にも多くの外国人観光客が押し寄せるようになり、衰退した陶磁器専門店がホテルと入れ代わるように急速に撤退していきました。清水寺の麓にある五条坂は、「焼物の街」から「外国人観光客のホテル街」に急速に変貌していました。戦時中の建物疎開の被害を免れ、古い町家を比較的残していた五条坂北側でも、急速に町家が失われ、周囲も含めて地元住民が住む場所が圧迫されていきました。しずかに残っていた登り窯もこれを契機に6基から4基に減少してしまいました。急増した外国人観光客たちはステレオタイプの京都を求め、清水焼をはじめとする伝統工芸の発展に寄与しませんでした。

インバウンドで嫌気が指した日本人観光客が減少していきましたが、2020年2月以降、新型コロナウイルス感染症の影響で外国人観光客の姿が忽然と消えました。新しい空き地が痛々しく、建物疎開の再来を思わせます。コロナ後には「ホテル跡」という新しい遺跡や廃墟が増え、ゴーストタウン化するのではないかと心配しています。

五条坂が失ったモノとコト

インバウンドと新型コロナウイルス感染症によって、五条坂をはじめとする「観光」は様変わりしました。そのおかげで、私たちが失ってきたモノ・コトがどのようなものであったのか、もう一度考え直すことができる時間的余裕ができました。

コロナ前、世界各地の観光地では、過度なインバウンドの影響で観光地から地域住民が追い出されていました。外部産業が潤っても、地元の産業は衰退するばかりであり、観光誘致に反対する都市も出てきました。

京都の場合、その産業構造から「観光」を止めることは現実的ではありません。しかし、質の高い観光客を誘致できなければ、インバウンドによって地域が潤うことはありません。世界各地の観光地同様、観光客優先の開発進行によって、五条坂も住民が住みにくい街へと変わりつつあります。文化遺産を継承して輝かせてきたのはそこに住む人々とその営みでした。五条坂では陶工と問屋を中心にした人びとの活躍が欠かせません。

もし、この街から住民がいなくなれば、観光客が見たいと思う魅力的なモノ・コトも同時

に失うことになるでしょう。登り窯も、その周りに集い、様々な作業にいそんでいた人々の活躍も、絵空事の記録だけになってしまいます。

登り窯の意味

清水愛子氏は、登り窯を囲むコミュニティーが五条坂の共同意識を生み出していたと述べています。「窯焚き職人に焼成という大仕事を委ねなければならない」ため、「焼成には、祈りのような想いがあった」。個人で管理できる電気窯とは焼成の意味が大きく違うのです（清水 2015、33・34 頁）。共同意識は登り窯で育まれました。その場がここに住む人々を多様な形で結びつけました。

五条坂の登り窯に集う人々は、多くの作品を生み出してきました。その祈りは最高の作品を作り上げることだったと思います。製作に関わる、高度に分業化された専門職集団が形成され、登り窯を行き来したのです（木立 2019）。人々は登り窯に願いをかけ、それによってそれぞれの命を輝かせてきました。

登り窯は単なる「窯」ではなく、生産システムの核と言ってよいと思います。けれども、登り窯はそびえ立つ視覚的な象徴ではありません。敷地の奥にひそみ、直接関わった人以外には見えないものです。五条坂が失ったもっとも大きな「コト」は、かつてのコミュニティーの場とその実態だと思います。町並みや登り窯は、そのことを象徴する「モノ」にすぎません。私たちが共存を望むのであれば、登り窯は象徴として活躍する場を与えられると思います。

技術革新を遂げた現在では、登り窯は過去の遺物にすぎません。登り窯は不安定で歩留りが悪く、煙害も大変なものです。しかし、それを承知で今もそれにこだわっている陶芸家があります。その理由は作品を見比べれば一目瞭然です。現在でも、電気窯やガス窯などでは、登り窯以上の最高作品を焼き上げることができないといわれています。

もちろん、電気窯・ガス窯のほうが美しく焼き上がる作品もあります。とはいえ、現代の窯業化学は、登り窯を「単なる過去の遺物」と呼べるほどには進んでいないのです。生産性や利便性は格段に向上していますが、私たちは便利な機械を使用することで、大切なコトを失い、目も心も退化していると思います。

度重なる受難に遭遇しながらも、登り窯はその都度生き延びてきました。今も4つの登り窯が残されているのは、関係した人々の犠牲的な努力の結果です。これらがコロナ後の地域社会を結びつける象徴となり活用されることを願っています。

謝辞

これまで登り窯に関連した調査では以下の方々のお世話になりました。浅見五郎助氏、猪飼祐一氏、井野祝峰氏、伊吹紫子氏、入江太津治氏・入江麗子氏、河崎尚志氏、坂口進氏・坂口雅子氏（嘉豊陶苑）、鷺珠江氏、佐野春仁氏、清水六兵衛氏、小川文斎氏、末広直道氏

(藤平陶芸)、山本和夫氏、余語琢磨氏、河井寛次郎記念館、藤平陶芸、陶点晴かわさき、故・湯浅士郎氏(楽只苑)、故・笹原信雄氏ご夫妻。この他にも多くの方々のお世話になりました。皆様に記して感謝の意を表します。

[参考引用文献]

- 木立雅朗 2015 「元藤平陶芸登り窯について－遺構と記録－」『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』京都市、35－68 頁
- 木立雅朗 2019 「河井寛次郎と京焼の生産システム」『近代京都の美術工芸－制作・流通・鑑賞－』思文閣出版
- 木立雅朗 2020 「登り窯の終焉と記憶をめぐる文化資源」『令和元年度 京都府域の文化資源に関する共同研究報告書(洛東編)』京都府立京都学・歴彩館京都学推進課
- 清水愛子 2015 「京焼の近代化における登り窯の役割について」『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』京都市、29-34 頁
- 中井治郎 2019 『パンクする京都 オーバーツーリズムと戦う観光都市』星海社新書
- 中塩路良平 2011 「京の建物疎開 克明に」京都新聞 2011 年 8 月 13 日付夕刊
- 中ノ堂一信 2018 『京焼 伝統と革新』淡交社
- 藤岡幸二 1962 『京焼百年の歩み』京都陶磁器協会
- 前崎信也 2015 「五条坂に残る栗田口の登り窯－安田家と京都陶磁器合資会社」『元藤平陶芸登り窯の歴史的価値等調査研究 報告書』京都市、17-28 頁
- 余語琢磨 2020 「京都五条坂北側・道仙路地の研究 (1) ー民俗考古学的視点からー」『第 47 回日本生活学会研究発表大会梗概集』日本生活学会
- 2020 年 3 月 15 日閲覧、近代京都オーバーレイマップ
- <https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/>